風雅和歌集　下

特別
へ4
8099
17(2)

へ4
8099
17
(2)

<2001-038>

早稲田文庫

風雅和歌集巻第十一

恋歌二

忍待恋の心を　　永福門院

はゝ世中もかきりのさきつる契ぬ奥をもまつ川枕にいまそこそ逢

逢後恋のこゝろを

うきことを一かたにやはおもひめくらむ待夜もふる言の葉の色

院冷泉

きのふまて心おもふ夜はしらぬ世に言の葉のうへにみえぬつらさ

従三位親子

かつはしるとたのみをきし言のはの色も今はうらみの秋そ悲しき

藤原重能

心たにすこしもさはりはかなきをたのみつゝつれなき言の葉の色

待恋を　　新宰相

いたつらとおもふ心のあまりにはさそはれぬ言の葉をたのむる

逢恋に　　伏見院新宰相

身のうきにとかめぬ言はたのむともさこそはあらぬことやと

寄鐘恋の心を　　前大納言為氏

うちつけにとおもふ言の葉をまちわひて入あひの鐘

恋歌とて　　永福門院

言の葉のあさき心のうちよりもたのむる秋いふにけりかな

待恋　　西園寺前内大臣女

まちつくしおもひそめてしあはれにもいまはまつ月の影

百首歌中に　前大納言為兼

きのまよひさぬよおもひてみる夜の深けれはいかになるとぬき

忍待恋の心を　前権僧正慈伴

よひのまは誰もしへめ我ゆかぬとつれなきまゝに忍ひてそ待

香隆寺前内大臣女

待世中にへたてなきおもふなるとや深くて又そ待かね

永福門院

夜のかねをとはぬかさしるやとまとまちかねし思ひはてなん

契明日恋といふことを

後伏見院御歌

いく度もすきにしことをおもへはかれとまやまたのまん

恋歌の中に　進子内親王

みえたえしわかきをさこそと待ふかき夜の人のうらみれ

後照念院前関白太政大臣

おもかけはたのみのまゝにぬれてきぬる契し月の影そこひしき

前参議方朝

いてしよりまたれし夜半の御まちとていと遠つらしかて

待わふる夜とあくるまてまつ人の身とそ遠かれ

月みれは恋しき君をおもひいてつゝつらけれは

恋を　藤原太皇太后宮下野

契おきし人の心をおもひ出て月はみるもみしよりそ恋しき

宝治百首歌中に寄月恋

藤原隆祐朝臣

嶋まけの松の板屋の風さえて山の月はいつ迄人はまつらん

おなし心を

源和氏

更まされは秋もかはらぬ人のつまとこそ月みる夜はに袖を志ほりん

権大納言公宗

明ぬとも誰かはしらむ人志れす待秋の月のかけに見る哉

忍待恋の心を

永福門院

まきの戸を風のならすもあちきなく人志れぬ夜のやゝふけし程

契待恋

従二位家子

人はいさあはぬ契のよしもなく待とてなにとかはらぬや待まさるらん

恋哥読せ給ひける

伏見院御歌

おもひわひてさらにとひもせぬ世の中は文たにかよふかたのなきかな

歴年恋といふことを

永福門院

我も人もあまりつれなきならひそとよそのあはれを風になきける

宣光門院新右衛門督

恋しくは

あはれなきさまに思ひとしるをみるに我こそ人のつらさなりけれ

忍恋を

院御哥

深き夜の文とはせてとも知らぬ我身の限りは今のかなしさ

恋御哥の中に

土御門院御哥

いふまては山となてしこまちかねてそれよりもとかは恋ぬ

御慈の心を　　伏見院新宰相

かきけくぬさのめゝを法へ忌てやさりとふ法も嵐き

二品法親王尊胤

法のよにそわきの契もたのまれぬゝきれをこのさかりにそ

進子内親王家書白

さのうやと我法へまて法世れはたしも秋人への弥とさる

従二位為子

法の道は深きも人のかはさあよいつかたまでいつ秋の

決意を　　前大納言經親

ちかひける身のうやさ南仏の契も法にそかきりありやは

釈教歌の中に　　権大納言資明

いつれをのあ毎と誰を知るこそ契りまことのむなしさ

悉聞慈　　左近大将道教

なきあとのへめくる陰を弥えてもかけけりな契やはする

百首歌たてまつりし時慈歌　　権大納言公宗母

法の道けに雖をきく人ぞみなこのみ御の席の葉には

進子内親王

心ひ庭の花も以て庭をとふ人さへめぐる秋のあはれ契る

慈歌の中に　　伏見院御歌

心もとなきの今を思ふやそれゆゑと頼むはかなさあはれとそ

御慈をよませ給ける　　永福門院

ひきのこゑひたゝなれて秋すそ又わたるへかりかなほと

題しらす

所からの心もすみてみるらん秋の月我もわすれぬ人

述懐を　　同院内侍

いつみゆきまちもとめしはとしもしさらすひくらし袖ぬらせ

恋哥の中に　　従三位親子

我かさのさけ衣もしらぬ人はわきまへしらぬとつくらん

院に二十首哥めされし時恋月

前太宰大弐俊兼

花のゆふにこゑかとこしとたかへて月かけをひとりみよとや

題不知恋とふことを　前中納言資藤

あらしふくみねのうき世はさ秋夜かなとしのはみもしられなし

伏見院御時六帖題にて人々によませさせ給ふ

に秋一夜へてそのときを

前大納言為兼

秋もせぬむら雨雲のほの月のすさらけつゝの影もみえつれ

二夜へてそさう

従二位為子

むかしそ又いかなるよ二夜もたへさりしありしとまてよと

おもひやる

西園寺前内大臣女

さもとのかゝゆきて猶いかにかなしと思ひ

暁恋を

賀茂重保

鳴とりのいさ河ぬれてそうらみつゝまた馬にあかり

恋哥中に　　進子内親王

むかしそのあさつゆのとこへりそはうやとよひまて逢見し

初恋の心を　　永福門院

あはれとも歎くとそまつるはあらぬ明日のゆふくれ

恋歌とて

とはれぬはつらき物から来ぬあきは明日をはまつ又なからん

堀河院百首哥に初会恋を

修理大夫顕季

ちきりおくかみのとかめもきけことひとまりぬあすの松原

逢恋　　源兼氏朝臣

いかにせむ今宵をしらぬ逢坂をまつとてくるとおもひそめけん

あふまてはせめて命のかりそめにひとかたりて朝

つかうまつりける　　従三位頼政

あひみせよ見はてぬまてもあはぬやさしとあはれぬるとき

大内にて月のあかゝりける夜女房のもとにまかりて

世のつねのとひしとも思はれさりけれは

藤原隆信朝臣

心をは雲井の月にとめおきてゆく身も知らすあくかるゝかな

題しらす　　よみ人しらす

ゆくすゑの月をはなにかうらみまし我の心そ我とはみえん

初逢恋を　　太宰大弐重家

あふことは何をかつへくとわかたきとおもふそまされきのふなりけり

忍逢恋といふことを　従二位為子

逢ことのなれゆく儘にあり数の夢よみえさしと人やこそしれ
世とゝもにひとり物おもひしてあかつきにひとつかけなり

前大納言為家

いかにせん世の人かすと成やせん物をおもひてなとふかき袖
ぬれし

安嘉門院四条

あきかせのつてを限りて人めつゝみそ人目そしつ
逢所とそらねつ

永福門院内侍

逢見ぬにこゝろひとつの夜長夜の物おもひは物ゆかしきも人に
見えそやかてかりそめに人をしのひにたゝあらぬ夜そなき

従二位為子

夢中逢恋といふことを　藤原為基朝臣

うれしさもあさきかへる思ひねの夢ハ覚てそわすれかねぬる
女の許にあかつきまかりて帰りて後朝になりて立かへり
てやつかはしける

前大納言為家

ねとはみぬ時さへ夢のみえつるは猶かへりける我こゝろかな
逢て

安嘉門院四条

たまくらの夢にハ逢てみるよりもたゝおもひねのまくらをそしる
覚て

法印長舜

ぬるかうちは逢とみえつる夢なれとさめてそ人をうらみはてぬる
世のうさへちきりしをしのひそはてゝ物おもはしと

秋の夜を長しと見えて待ちつるを夜のあけかたに思ひしるかな
やて何かはたのみけるかな

前大納言為家

きえてなほあはれをかけよ別れ路の長きおもひにきえしのみかは
恋し

安嘉門院四条

契りしはいつよりとてか世の中にたえし思ひのかはらさるらん

忍逢恋

徽安門院一条

忘れ井の流れの底も知らぬ人の忍ぶる程も猶やつれなき
かはらしのひとつにまかふ袖の色も残る思ひのはかなき

建治百首中に

後西園寺入道前太政大臣

花しもなきしも人しれす

逢ふ夜はおもはれて思ひ出つる今こそなか絶え
かはゐの底ゆく水のあさからぬ思ひはすてにさへやあらまし

恋の中に

章義門院

むかしより此世のほかに常ならぬ契りをなににたのみけん

百首中に

徽安門院一条

まちわひてみるそかなしきゆふくれのいかにせよとかかはるらん

忍逢恋

新室町院御匣

あまのはらかすめる月の影よりも人しれぬこそあはれなれ

安嘉門院四条

人まちて思ふ中の暁をしらせてなけや鳥の声々

恋の中に

徽安門院

今宵のこゝろはいかにかはりても又つきにこそひとりすむらん

別恋の心をよませ給ける

後伏見院御製

まれなりしそのよのわかれのなこりまてさもなき風もかはりき

おなし心を

権大納言公宗

うかりける人をあかぬ暁の空のわかれをなとかはるらん

入道二品親王法守

ゆふくれは秋の夜すからいすゝ風を又はわかれの物とこそしれ

左近中将忠季

さても又いかにともせてむすふ夜の手枕ふれておもひぬる

恋の歌とてよめる

永福門院

衣々をわかれてはまたひとりあかつきの床

暁鐘と（？）いふ（？）事を（？）

従三位宮子

晩鐘の声もきこえてわかれぬる夢の契も

百首の歌の中に

太上天皇

なけくらの秋のさむきあけかたのあはれをきゝて身をわかれぬ

進子内親王

出てゆく又立かへりわかれしは別の戸口にあけぬるなり

恋歌とてよめる

従三位親子

あかなくに又たかへりてあかなくにかへるさみちのあさきよも

百首の歌の中に

前中納言定家

手にむすふ雑もあらはあらし山の井のけさも露けき袖の白玉

恋哥十　　従三位頼政

あはぬとてなく〳〵かへる道芝の露はわか袖を持てたるか

別恋の心を　　後伏見院中哥

又やみん又やかへらんと斗にておもひ親しけさのわかれち

前大納言実明女

我からの人やあふにかつまきの打つきぬ道行あつる車

恋哥中に　　前大納言為家

いくめくりかけのこれ見舟の世をはたりやくさにとひ乱ん

進子内親王

若狭とはいかにとにかく我住つきし文この葉とをとゝのはてみ

恨親恋を　　永福門院

せめてその長き夜のさめぬまに文おもはくは逢ことそなれ

従三位親子

いはとまさ川日数は尽ぬれと猶朝もさめぬ心は絶き

永福門院内侍

情よみ我長夜の思ひは覚えつゝけさつみ漸く横須そえ

九月尽の暁帰る人のもとへ

和泉式部

人をゆかす霧は離れすたちとまりたゝまてよあはれ来ぬ

恋しくは　　よみ人しらす

出海にのこる限りの夕かけのおもはくにへき物ゝ

しら雲をよそにのみ見し末川をいつのまにかは
おほつかなくも見えわたるかな

藤原元真

風雅和歌集巻第十二

恋歌三

題しらす　　後二条院御歌

行々にうき世に川竹のおもひふしに我身ひとつの袖ぬれぬ

後宇多院に奉りし百首歌の中に

従光明照院前関白左大臣

うき今は我のみしれと見しよりのこゝろのかはりゆくを恨みそ

題しらす　　徽安門院

限あれはかくてもさりともなからへはいつまてとまるこゝろなりけん

百首歌奉りし時　前大納言実明女

なかなかにおもひたえなは中々のつらさもさらに我身ならまし

恋御哥の中に　院御哥

八よ御して人乃我この哀をは我にしらせぬるかな

永福門院

あちきなの哀よ一夜しひきてこそひかへて今は成ぬる

従三位親子

かなしひ命の思ふをは人妻に結ひの名のひけりけれ

従二位宣子

恋をしも思ふ緒成そわりぬれはひとたせぬはわれ

進子内親王

哀れいは手枕やあらはしりしとてもいふな

前大納言実明女

忘れしよその人はいはれの哀わさこりしきは成見ん

院別当

さのみやはかはりもすたのまれぬとてはいへのけれとも

大江高廣

恨えしもの思ひは中にほのめかし結のならはみゆれん

契る事をいふ事を　従三位為理

しのふれも忍ふ頼の主れい思ひ契りしもなき

恋五首哥合に忠命

院冷泉

一夜の逢ふかはし哀なせいまさしもかんたまにものを

契恋のいへを　藤原為名朝臣

ちかふこゝろをまそのみをよそにおもはゝ家もつかせ

恋哥の中に　院兵衛督

ちきりたのむすゑのむかしのつらきねはいかにとかせん

院御哥

おもはゝたえまにしのひてぬる契をいかてしらせむたのみをのみ

儀子内親王

おもひきりそめぬる身そとまちなからへをあはすさて

恨恋を　今上御製

ちきりはなほ身のほかにかゝらつゆとおもひしらまし

院冷泉

さはりとてかたくそいひし人もとかはらすくれ

恋哥とて　前大納言為兼

おもひわりとなけくそなほしのひきことをかこちつゝ

ものおもはぬさきはよのつねそやかくなけくとはいまそしる

永福門院

なくひとはさためなきにやとおもふみなしおもふそのいのち

寄人恋といふことを　院御哥

わかはそのむかしのあひはゝ人心をよそにすさまし

百首哥奉りし時　徽安門院一條

人よたゝいはぬもよそのちかひなるをあはれとみし

入道二品親王法守

まよふおもひのほかのいのちとはなくもかなしきことの

宜秋門院新大納言

かはりけるひとつらの哀れもうらみてゆるしとぞおもふ

題しらず

永福門院

さりともとたのみしすゑもあさましや人の心はいかにかはりし

それも哀れにきこえてはいみじきにやさらに猶

院百首歌合に恋題を

進子内親王

思ひわびあふ瀬も絶えてたのめつゝ一かたならずまさる嘆を

恋歌の中に

大納言宗女

人をなほ今はとおもひしらるゝも我のみつらきこゝろなる覧

後京極摂政左大将にて侍りける時家に六百番歌

合侍りけるに契恋を

大蔵卿有家

さだめなき世をうき身にもかはらじとちぎりしもかなしきは我のみなりけり

千首歌の中に

前大納言為家

契りしはその後にもたのむべしと思ふ心ぞあはれなりける

百首歌奉りし時恋歌

権大納言公蔭

さりともと思ふらむ心ひとつにてかはらぬ後の世の契とぞ思ふ

恋歌を

院一条

[illegible]このよの世までとけりし契とぞ思ふ

恋情といふことを

左近中将忠季

おもひたえん何はつらかりしとえしも人の恵よりおほえす

寄身恋　従一位教良女

身しらぬおもひともやならんとはいきけるへのおもひを

題しらす　従二位為子

我こそはさきたつ命あるとはいへ人のこゝろやなほとはすらん

伏見院新宰相

かきりあれは契しかたにのこるへきいまさらわれの何うらみん

手枕恋といふことを　徽安門院一条

いたつらにもちしらぬ袖やみゆるなく涙あるかに人のうらむる

稀逢恋　大納言公重

俤のまたいくよをか契りあれは涙もかれてあひ見る人の夜の夢

題しらす　徽安門院

うらみてもうしとをしにて哀くらしけりけふの人はちきりを

哀なる中をも何とおもひける人の契とおもへと

百首哥に　太上天皇

おもひかはしなれをやとおもふ人の心のうらみきえはこそされ

恋哥とて　儀子内親王

我と人おもひたえんのかたみそれをたゝあひはつきなきふかきおもひさ

恨恋の心を　後光明照院前関白左大臣

来ぬ人をうらみそさしやるよりそ人の心のほかにそ思ひそあまるへき

山本入道前太政大臣女

流けるをと猶恋すきよみの袖の哀をは知ぬ人のおもひよ

恋哥とて　権大納言公宗母

あま飛ふしらしつの根の雨かけて思ふ成ぬるとの跡をたとる

恋五首哥合に恋哥を　徽安門院一条

人のからは歌よみにてあまた見しよりもいつまてひとりふれ

院一条

いまかへ見えしつれにすまの思ひつゝ夢のおもかけを

恋哥の中に　前中納言公雄

面影のいかなるものそこまらみれ夢の覚てまたも見ゆ

藤原懐世朝臣

をの川の夢もなかりし逢ことも絶ぬる人のかたみにそむかれ

従二位為子

おのつからゆきて夢をまみゆふそなくへのことひのなすら

前太宰大弐俊兼

はかなさは世のむつひと思ふるも人にそへて猶そ恋しき

百首哥の中に　太上天皇

世の契いかにむすひと思ふともひとりもそへて人の恋さ

題しらす　永福門院

おほかたは年のむへての夢をはかなむにそそ思ひ絶ぬ

院兵衛督

たのもしや夢明はへてもいと逢人ゆへにおもひのきまはそはん

伏見院御哥

かきくもりゆく時の気色にかはりぬる人よりさきのなみだめの空

恋涙といふことを　徽安門院

落そめし我袂の涙よりをさへかねつゝゆるさぬ袖の橋

永福門院右衛門督

我のみやしらさは涙なきなかにつらきを恋ふる心を思ひ合せよ

院百番歌合に寄心恋

兼清

思ひあまり涙はいくつらさへやつれなくて涙のとくらく

題しらず　今出河入道前太政大臣

悲しさはさぞかはりゆく涙さへ誰がための袖のおもひ

前参議家親

流れ来し思ひの知るべなき涙の袖のまたかつるらん

うきつらさを思ひ出てゞ心から今ぞ身にしむうきのこゝろもおつる涙

藤原宗直朝臣母

恋御歌の中に　伏見院御歌

涙にも我ぞしらるゝ袖の上に君ならめやはなりゆくぞ今の身よ

おもひ涙をまたくまでありめぐりあはむ人のためさへなほぞ

従二位為子

我ながらあまりの事とおもひつる心はいかに人はつらき

百首歌なりけるに　徽安門院小宰相

まつらさの涙は定めなきよしのみをかしき

文保三年後宇多院へめされける百首歌の中に

二品法親王覚助

人のおもひみちのかくれ風のおとするもかよふもむねをはしりて

六帖題にて哥よみ侍りける中に　おなし

前左兵衛督為成

文書にはしるしみえねはくるしとも恋わたる人の面影

題しらす　貫之

今そしるおもひの袖のなかれては恋しき涙の川の底まてあなれ

うき恋に物思ふ人はあま雲のよそにのみ見てあかぬ（？）

恋哥の中に

権大納言実家

恋わたるあまの川瀬ちかけれはなみたの淵にわたりそかね（？）

院に三十首哥めされし時恋月を

権大納言公蔭

あま雲のよそにへたてゝゆく月のみやすみはてぬ妹に恋つゝ

百よのそらをなかめし時

正二位隆教

我のみやふかきおもひをかけつゝもあはれとたにみぬ人のつれなさ

後京極摂政左大将に侍りける時家に六百番哥合

侍りけるに寄風恋を　前中納言定家

しらさりし秋をうき世の風の音もよにかはる枕にしをるゝ袖に

恋海といふことを

権大納言公蔭

しほみちておもひの海のふかけれはとゝめかねたる袖のうら浪

伏見院御哥

伊勢の海やしほさゐにうかふ寺ゆふを神代のまゝにまもる浪の遠

遊君あまたの御世治るかり

恋しさはおさへもかたき縁もなく我身の筆をすさむ身にも

寄書恋を　権大納言公宗女

なかなかに見えしわかれもなく文章も義なるへきかはる事とも

儀子内親王

書もかはしとやふ玉つさよ人にしられよはやすまぬきえの葉

宣光門院新右衛門督

なかなかに人まみえぬ玉札はなかなか物のあはれにいはん

通書恋といふ事を　法印実性

かくふさへいさたのまむいつまても定めぬ水くきの跡

人のおもひをあさくしもなほとかめたるそ恨なれ

よみ人しらす

旅ころも山路のつゆのさぬてかのなえゆかしさの御事に哀きを

相模

文のみそ明日をせんもなるを見る雲てかきもおもひさためかね

実方朝臣みちのくにまかりての後人のもとへつかはしける

恋しさはかはかくても玉ほこのかけれぬとやしるさけり世事ちかふ

三條院女蔵人左近

あらやさらにおもひやりけるみちの今はそれに見えぬるまことのあらはる事ならめ

宝治百首哥に寄書恋

花山院前内大臣

かはらしな人めは白玉志らせしもえそにしらかはる袂とそ思

冷泉前太政大臣

志ら玉のあはれをみるとたとへてもあまの涙の露をいかてか人知

風雅和歌集巻第十三

恋哥四

権中納言定頼

日ころ経るかひなくのみそ待わひて

こゝろ色のうちなりける袖のうへに人を思ひつゝ

あはぬ日数の積るとも夜半の枕をたのみつゝ

左近大将朝光

雁かねは息やしめやかに秋風のなかき夜すからきゝや恋しき

馬内侍

いとゝしくぬれまさりけるよひの袖なみたのかたもあはれなる哉

貫之

恋しくは

かへる鴈我をしてよ常社にたえにしこそ恋しかりけれ
人のこゝろのあさくみえ行さりけれはよめくよ
めて　　和泉式部
水鶏たにたゝく音せは槙の戸を心やりにもあけてみまし

題しらす　　読人不知
いつはりとわかれし日より里数の衣をてしさ恋つゝそあふ
偽りて忘れし物そ王ひしこに恋は消されと忘れ世をしよ
おほ東の古里にいつ繪(?)我をかゝり夢にみて
王ひしこそ逢らしのあすゝゝの當世のこともおもはん
　　小町
世中大あまの川まことならはけ世悪と家の中しらさは

恋乃心を　　永福門院
わすれしも人や我をもおもひつゝまてまてよりの人の恋しき
恋命　　進子内親王
色乃なき木もみゆるもこの頃の気まかせに物思ふ人の名
寄雲恋を　　前大納言為兼
物おもふ心の空に深きもてめくりみるもと人や恋しき
　　院御製
恋わひぬ移りかはるも人の知るせし秋とそあはれ行く雲の暮
　　永福門院
いつまてか人のうき絶え見えしも消ゆるもあはれきものの村
恋御製の中に　　伏見院御製

我をしてたへぬ思ひに沈むまてすきゆく秋のかなしさ哉

同院新宰相

待よはのくもりてかへるおもかけにそむくこゝろをかけぬなりけり

太上天皇

待よはの月の秋にもあらさりきこゝろにそむくゆふくれの空

従一位教良女

かゝやくとおもひしはきのうへにそかゝるもかなしき世にもさかゆく

前太宰大弐俊兼

今はとてなかめなかめてみるたひのさそはれぬまもなくおもふなき

従二位為子

あはさりし人のこゝろのなかにこそわかれもそふとおもひしられ

日増恋といふことを　院御製

此我のうらみもしらぬ人の雲井にあさひとゝもにあやにくにして

題しらす　権大納言公蔭

限りなき我おもかけとなりにしよりわかれのかたちをひくてなかれ

伏見院御製

いとゝ我身のさかりとなるかひもなくおもひの涙そ

後伏見院御製

恋しかるひとのすゝむるつけにいとゝおもひそまさりける

二品法親王寛尊

定なき人の心の色みれは夢よりうつゝにかはりゆくらむ

従三位親子

後恋又首前今逢後に

ものさびし一つの波のひゞきや川寄る人影はおとも絶えぬらんと

儀子内親王

百首歌たてまつりし時

権大納言公蔭

おもひとけばはかなきことの数ごとに物思ふ人の嘆くなりけり

述懐歌とてよませ給ひける

院御製

たのみこしひとりならねど大かたの人は心にしたがはぬ世を

太上天皇

いさゝめはなほわすられぬ庭のおもに浅き流のさかりしのぶて

永福門院

大かたの世は底にしづむ人はいとゞ数あらぬ身をこそなげけ

五十番歌合に澗底松を

院御製

枝もなき根をそへ井に朽ちはてゝいはぬ松の人のあはれも

永福門院

かたりゆく人のこゝろのうきやうにいつかとなくてむかしなりけり

述懐歌の中に

儀子内親王

身やさかゆく花のかゝる人もなくてかみのはなむかしなれける

五首歌合に述懐といふことを

院御製

末とほくいはでも人を恨みしにかたはらにてもあはれなるかな

渉変恋　　　　式部卿恒明親王

こゝろみにわすれもやすと忘らるゝ人のつらさのまさるまゝに

洞院権大納言

くるれはとそのむかしの恋の心ものかはらてむかしにかはる契の

変恋の心を　　　　覚誉法親王

かはりゆく心とみゆるそのまゝにあたなけの情ならすや

永福門院内侍

見えしより心ゆるしの人の心にもあらぬ我をみせはつれなき

前大納言実明女

うきはなほ我とおもひしかなはぬに人のかはらぬおなし心は

正中百首歌合に寄人恋を

永福門院右衛門督

一夜はかり見しより人のおもかけにかはるらん人の情そ

文保百首歌合に恋の心を

儀子内親王

かくはかりつらさをしらぬ身にもまたあはれかはらむ人のつらさは

恋歌中　　　　後伏見院中納言典侍

うとくなる人の心はかはるとも我ならはなほおもひ出なん

宣光門院新右衛門督

人ゆへにわかぬる夢のうちにまた契のそてそぬれつゝ

藤原実興朝臣

世のなかのならひとかはる人もあれと契の情はかはらさりけり

藤原俊成

修行し侍りけるにつき侍りさりとてうちの御かたにて

極楽の心を　　権大納言宗家

ながしむ坐す都のうちの根はつねにおもひはきそ

無常とて　　進子内親王

はかなしと思ひ知れどもつねに根のみはなほ生きかへらん

儀子内親王

おもひすてこの世にさきにさくらは又なきかずにすきぬれ

前大宰大弐俊兼

あさやかて一つ残さむ後のかはけてはるかなきにを

院五首歌合に無常を

冷泉

衰へぬやおもねらきやそれをいかなるまへのかたにて

無常のうたとて世をかさね

院御製

人の世はあさき程こそ忘れはるかなる人そなほさきにき

康永二年歌合に無常を

人の世の家のことはかなくおもふ世にてそさかりとなる

永福門院大納言

玉緒のさはなくとも世のかけて世のかけることのとはいかれて

無常　　徽安門院

夢まにとおもひし世の露むすふ事のよそにあり

伏見院三十番歌合に七夕を

延政門院新大納言

いかにせむ雲のゆくへの風の音も待わふるよりの夕暮の空

七月七日よみ給ける　西園寺前太政大臣

七夕のちきりし秋をこふるよりいつとさためぬ我思ひかな

恋哥中に　兼之

絶まあふと聞七夕もあまの川たえてあふ瀬はありとこそ思ふ

寄七夕恋といふことを　後伏見院御哥

待ふかきわか衣手のおもかけにまたあひみての空に涙く

永福門院

跡し浪

たましひの中にさけくうちに萩のかれ咲秋まちかねり

秋の夜ふかき萩のかたちの枝のうへ露のひるまに置雲あやしき

へりたると世の　光嚴院御哥

恋歌の中に　兼之

萩の葉に色つく秋はそよとおもひまきつかまくすすきつかは

まちやとの萩の葉にふるさとのをはなすゝきもかくそ思へる　よみ人しらす

鎌倉右大臣

春をまつこゝろのうちに秋風のひとつ吹上の露そむすへき

おりふしと待つる時ありはなみく

和泉式部

物思ふよと我おもふ人よこゝろひとつ月影とはゝや

月乃歌久我内大臣の許へつかはしける

小侍従

なかむらんおなし月はみる物をかはらぬ心をしらせよかよふりせは

返し

久我内大臣

あらひ家とはきたまや月にかよへからは心の光にしらせて

恋御歌の中に

伏見院御歌

おもふ人こゝろのかよふ月もまたいつくやみるらんおなしなかめを

同院新宰相

つらきをはそのよの月はなれもしらぬ人のうきにしらしを

権大納言公蔭

光いふおもひけんのおもかけならましかは月は海ゆくとこそ

右大納言忠家家にて歌合し侍りけるに寄月

恋

前中納言匡房

みぬ人に恋しさまさるのきのはに人をしのふる月をみるかな

おなし心を

藤原隆信朝臣

かはらぬをたのむもはかなしあひみし秋の月にわかれて

暁行といふことを

大僧正行尊

おひ出るものや恋しかるらん人をおもふ有明の月をみるかな

恋歌の中に

中院右大臣

うき物と恨みしものをわかれにしありあけの月

千五百番歌合に

後京極摂政前太政大臣

王維とこえかゝあた世にし山のおくにしかもなくなる際
をしし候　こゝろへ候
春も今と申すなかで今は老せいは枝風吹にて月よりとめ
いて我がおもひのなかせぬけ曉の朝雲こうし雁そなく也
伏見院御製
こゝろ葉にいはゞ恋しきせいは行きまた居帰つてゆくいつかの御
永福門院内侍
花文長くたみてはやせん袖ぬる床はおもふ気にて
順徳院御製
また忘れんと思ふなそのゆへいつかおとろへにけるみをしのぶ人
前中納言定家
うし世そえ誰ならとはんつゆ月そかゝらんいつ住かの大空
後京極摂政
人まうけのいはひさえそ今とけ行いかさうを思ひとさだめと
藤原定家朝臣
慈悲と申す事と
我ゆゑ家りかれぬいはれや君とすれかき心
藤原親朝臣
君ならぬ人のあまた世なき行の人の情のあはいかき
慈寂有
またいはれむまでこゝろえてよあき旅人まれなる思ひさせ
従二位為子
かくそこそとやよりとにいつほられきかつこそあり
左近中将忠季

恋命を　右大納言実明女

うきながら人のためともなきはつらきにしたくひぬ命をすてゝ年ふる

題しらす　伏見院御哥

恋しともいはてそあるへきにいひてまさるこゝろのつらさをそしる

儀子内親王

うきもうしもとひさらんとおもふとも身の世にあらは頼みこそせめ

伏見院新宰相

人の身はなそうけかたしと思ふにもうつりし人の心をそ知る

逢不會恋　民部卿為定

おなし世に又とひかはす物をこそたのむにかへてうらみつゝあらむ

恋哥中に　祝子内親王

うきにくゝもやとおもふ常にしも昔ゆへ人は我をのこされ

恨恋の心を　権大納言公蔭

恨きとおもふはかりはおもひしにつれなき人はなからんもかな

百首哥奉りし時　左兵衛督直義

うらみてもかひなき身とはしりなからかへる心のつらさなるかな

恋の哥に　[illegible]

かなくもはしらすなりぬる心のうちをつゝむ袖の涙かな

寶治百首哥に寄法恋

前大納言為家

さまさまにおもひかゝりし法のみちもかはらぬものはこひのみちかな

六位小藤と云ける人に　徽安門院

人の心のおもかはりせしとみるまてにかなしきことや我にしらるゝ
題しらす　　永福門院
さ夜ふけて今は別し夢とめてさめぬるいつの夜のなこりをかこふらん
寄情恋といふことを　　権大納言公宗
まち侘は人よりさきに恨ぬるまつ夜もあはぬ恋とやいはん
藤原宗秀
恨みてもおもひしられぬかなしさはいかにせよとかつれなかるらん
恨恋の心をよめる　　前大納言尊氏
うき中に恨かひなきつらさとそ思ひしらるゝ一かたもなし
題しらす　　永福門院
いまはやとおもひはてゝもおもへは猶そ人のうらみてのこる
恨ても今はかひなき人をたゝ恨はてゝも猶しのふかな
建長三年吹田にて十首哥講せられけるに
後嵯峨院御哥
うき中にうらみすてぬるなからへてもなほおもひのあるにまかする
心ほとにつらさもかへる人そなき
徳蓮云
はかなくも恨やりてもうきものをまたのちの世の身をかねてたのめり

風雅和歌集巻第十四

恋歌五

百首の歌の中に　　太上天皇

恋しさに今はと思ふをさても猶言の葉をさへせてしられ

恋歌の中に　　徽安門院

ゆらひ初め契りしふかきつらさゆゑ人の哀の世にならひつつよ

永福門院内侍

まちかねかつはそれも憂きにくえてあはれにはまつや思はん

内大臣実

その川の末世あるやと絶えぬ思ひはいかりとまりてすむ

高階師直

あらぬ人思ひもやせむとはかりといひなれし心の今はつれなき

法皇御歌をたてまつりける百首歌の中に

前中納言雅孝

なかなかにあはれとぞ思ふ我がことは恋しき人のあはれとは思へ

恋歌とて　　儀(?)備朝臣

あらふる思ひはてぬと契りしを思ふは猶そまさる恋かな

殿富門院大輔

忘れなやと思ふはかへて忘れぬ心ものつきに今の世のとは

権大納言実家

人の心のうきにいかで命もその恨みつきもせず

題しらず　　よみ人しらず

玉のをゝかく結ひてをくはさはかりの河のせに思ふ

玉かつらけふ行あひて土と見ゆるちのありし昔

おもはる人かすおもへ山もひとつならぬたへはかはらし

小弁か許に書やりける人おきてきたる

かへりて侍りける　藤原道信朝臣

露をたに袖にはおかぬ夜なかなるものを

従三位頼政書えて久しくなりにける女のもとへつかはしける

ひとゝせ人のもとにまかりて後あひ侍て中つかはしける

もとより人のしる

しるらむと思ひしみやこに

よそにして

従三位頼政

人をみれはむすふちきりのたえはててゆかりのあはれ

遊御前にて　二條院讃岐

いそのかみふるき人のあとをみるほとのかなしきに

浄妙寺関白すみ給ひける所に人々まかりて物かなしかりけるに　従一位為家

まつひかゝれるしきのふはたれとかなしみて花の枝

ありはてぬ世をせいつかは

従二位為子

をしみてもおのかゝとにはなれる花にいとゝなれし

永福門院

花はちりねはこそねをさむみしかて

みる人を捨ばわか身はめくりきし世はいつのうきをそれいまさん

権大納言宗家

なけくらん人こそあらめとてもなき人のうらみも身をのしる

西園寺内大臣女

うしとみし世を家はなれてはうき世のほかのすまゐそとふ

無常

伏見院御哥

いとふへき身かはうきこそかなしけれ世にふるほともはかなき

前中納言重資

なかなかに我身ありてそわれやおもふうき人のうさを

百首哥奉りし時

権大納言宗家

今はたゝ世をすてはつるなかにしもうき身ひとつそ[illegible]

述懐

権大納言資名

身をすつる我身をたにもあはれまむ世にたちかへる人もあらなん

親子内親王

我なからよそにたに身をはなれてうしとおもひしうきもあはれさ

百首哥奉りし時

権大納言宗家

うき身をそおもひしらるゝものゆゑや身をなけく人のありさまなるらん

前大納言為家女

又かくてあはれにうき世をすつる我はまたなほ世にそ[illegible]

従二位為子

恨あるへき

伏見院御哥

世のうきを思ひしるへきこのよにもあはれはつもる身にはしらるゝ

思はしもとゝめし人の跡もなく文字はさしてとゝめしも惜
あはれなる御言葉やかきはなれぬとおもひし人のかきをきしかな

百首哥奉りしに
徽安門院小宰相

とし月のおもひやる今はつらきそのことや忘れなん

関白右大臣

頼みこしその梢のあはれ紅葉に色に人の世の中を思ふ

左兵衛督直義

逢ことはてゝあはれ世にすめる世の契りそあるそ心なき

無常の中に
従三位盛親

人はみな後のあはれもおなし世にいかにしてかはかひしなからめ

西園寺前内大臣女

逃るへき方なきまゝに浮世にはいとゝかひなき世の中にゆかしき

式部卿恒明親王

おりのみかへしとあるくいつか[illegible]世の後の[illegible]とを

永福門院

いとひつる我のこゝろもよに出しとひけることを知らぬ
志ひのこのはなくあたらしつきも今はとふ雁も鳴き

同院右衛門督

いにしへよりおもしろき文のなかにかき世の我もうらめしき

寄雲恋
朔平門院

詠めゆく昔にかはる雲のうへをあはれ涙の袖の蒼きしけしも

錦物催恋といふことを

永福門院

月影は霜の中にもみえわかず世はあはれなる時雨ける哉

忌恋　　弾正尹邦省親王

まつ神には今は絶ぬる月みかはらぬ契もがな

遇不逢恋の心を　前中納言定家

心ひとつ又おもはれ世の月はみなかの命にかへる契を

寶治百首の中に寄風恋　従二位頼氏

我恋は吹く風につけてこそ枕はなれぬ月をとめけれ

恋哥に　藤原朝定

逢ことは朽木の橋のくちてなからふかりの道ゆえぬ哉

侍従隆朝

俤のいはぬかたみと思へども[illegible]有明の月

前参議家親

おもひ入る又あさき海に[illegible]

百首歌中に　太上天皇

[illegible]

前左兵衛督惟方

[illegible]

相模

[illegible]

故京相如のよすかにて待つらはしるらむつらつ
ゆゑ　よみ人しらす
君ならて秋の花とは知る人もなしさてふ人はしるらん
恋し　藤原相如
思ひときはは我をいとふ人さへあり人も無きには
大伴良吉にゆりてまれ
中納言家持
長月のみしかき夜はあかぬ身をほとあるは恋しきとか
むかしよみ人しらす
春よりもさこそ見えける恋の玉のをのみ惜しき気のおもひける
人麿

我妹の枕をしらぬやその海のほとり昔おもひよはの月
人はたゝ世の　花山院御製
いにしへのおひも出つる月はよき川に絶えてし絶
御製
思ふとは我を捨てさり見えしとやらせもて人のさし晩
よみ人しらす
西園寺前内大臣女
うき世とも見えやらぬ心や恋しきとも見えあはれと人のさし渡
永福門院
はるかにさしても恋しき(?)ものにほふときはなれ出そめし
伏見院御製
夕暮の空よりもなほ世にわれをいとふ恋の定め

なほ頼む世にありやとかつらく人に待よ京に頼みまゝさとしまてしれや

果てれきらし契らん人の事をあらさりまれは思ふ

きけの人にかはりて見え侍りける

京極前関白家肥後

たのみこしことは人の夏らぬ心わすれぬあかすと根つ

題しらず

殷富門院大輔

あふ事も今はひさしき延ひかくあらぬ契をおさへ侍

年ふれてひさしきとはぬ人に五月五日つかはしける

待つへき人の(?)て

永陽門院左京大夫

たのめおく事のかきりのあやめ草我のこゝろき待よ侍る

遊御歌中に

伏見院御製

西行のもとよりそれなりとへのゆきかひなりけるを

永福門院

ともなれは世のなかの世には人のうきことも見ぬかにあらぬ桃ぞ

善成王

うち見えすい人を恨みやのこゝろさもしらす知らりとぞ思ほゆれ

按察宗光朝臣

宝みてもわかいにしへにおもやそつそれなり頼むまとふ

百首哥奉りし時恋哥

左近中将忠季

かくしつゝありへむ世こそなかなかにうき瀬をしのふさ

題しらず

永福門院

人なとて衰をは日にそへて身にしらぬ数のかきりはてなきき

伏見院御時六帖題にて人々によませさせ給ひける

忍ふ人偲ふといふことを　新宰相

よの中のうきにつけても人の心のうきはしられて

述懐御歌の中に　伏見院御歌

おひて後ふるき衰もいつの世ハかへらぬ昔のありしより

今出川前太政大臣

いはてたゝみを知ることもいはぬ人もさまさまに何も思ふや

藤原隆信朝臣

思ふもそおもはれもいとはぬ世中にあるにかひそ人をうらむへき

題しらす　前中納言為相

老らくの後にかゝる人の身なおなし世の中の住居

述懐歌あまたよませ給ひけるに

從二位为子

きのふのまつ世をそのうさもきのふまたよそに今日の身をさくる

題しらす　永福門院

たつねても見えぬ心のうきはかりありて世をすてしにそれ

千五百番歌合に　源家長朝臣

何にかは世をすてたとおもふ身の何かあるなるやらん

述懐御歌の中に　崇徳院御歌

なかなかに老の衰もくのかすはありし時よきそれ

從二位宣子

そのかみはよゝにまかりとけりしに我身ならぬためのよの月

建長二年八月廿七日庚申百首会に詠侍し

前大納言為氏

思ふその人のよはひもかはらねはいかはかりの年月をへむ

よみ人しらす

風雅和歌集巻第十五

雑哥上

年のうちに春たちけるにおほやけことにおもひて

中納言為輔

あらたまの年のうちより春たちてきのふはふるき人となりにき

春立ぬと言事を

左京大夫顕輔

春来ぬとおもひわかれしたかはまた人の心に長閑ならむ

題しらす

大江頼重

かすみゆく春ともしらぬそとのもに松の嵐はいまさらに吹

さえかへりけり

永福門院内侍

みなかみに霞たちそふすみゆく山のしら雪やきえぬらん

正月一日雪のふりけるやとへ人のもとに侍りけれは

清原元輔

年ふれは春のきたるを宿ことにかはらぬ雪のふりかゝるを

見しつゝ

夢窓国師

玉箒我とはらはし春のさえ庭にのこれる雪の村消

太神宮へたてまつりける百首歌の中に残雪を

前大納言為家

さかきとる神山の雪ハ消やらて春はきぬらし

平重時朝臣

去年の冬はしめにけるとかく思ひなからへ人の雪ハ分るか

隆信朝臣従上五位にて侍りけるに一級ゆるされ

侍りけれはよみてつかはしける

清輔朝臣

位山ふもとにほそき谷水にこの春風もとけさりけれ

也

藤原隆信朝臣

位山春まちえたる谷水のとけぬハ人そそれとしらなん

春の歌とて

大中臣直宣

雪かとて我思ひ出たる山川の春ハきえつゝ

ある人の許より在原業平朝臣家の梅をとて

人ことにそとりて侍りけれはよみてつかはしける

題しらす

世をいとふ人もあらし春やむかしの宿の梅かえ　前大僧正慈円

定家卿の尾上にすみける家に老ひて入てまた人
かの月うつりかの見ゆるうつりて梅の木の枝
にむすひつけゝる　永福門院内侍

忘られぬむかしをとへはかへりてかはらぬ宿の梅か枝
せし　前大納言為世

梢の花も春の梅か枝又とはゝかり今ま春残

春哥とて　藤原教兼朝臣

春風の心のまゝにさそへともまたむかしのことはりにひかへかり

平久時

散ちる梅はかひなき夜の闇にも香りて春を
伏見院かくれさせ給ひける所に参りて後春の
もとめて　前参議家親

梅花にほひひかへてとあらぬ昔を立ちしむ袖

春の御哥の中に　伏見院御哥

あけぬとてやまももしかへすなかの春霞に

春山霞といふことをよませ給ひける　院御哥

かすかにも長閑けく山の松

賀茂社へまつりける百首歌の中に霞を　皇太后宮大夫俊成

立かへりむかしの春は霞

海邊霞　前中納言長方
よさの海かすみわたれるあけかたにおき漕舟のゆくゑしらすも
春の比天王寺へまいりてよみ侍ける　寂然法師
いりてみれはしられぬ難波の春のけしきはあしまにそ
春曙を　九條左大臣女
しらこゆくはかすかんのこゑ乃ミ雲にきえゆく山のまれ尾
源頼春
しはし猶霞もふかき山のはにいつるとみえぬ春の夜の月
従二位為子
しのゝめの風静なる山の端にかすみおりて雲そたなひく
左大将に侍りける時家に六百番歌合し侍りけるに
春曙といふことを　後京極攝政前太政大臣
みぬ世まて思のこさぬなかめより昔にかすむ春のあけほの
前大僧正慈鎮
おもひ出よおほりよつまてんかのこる春のあけほの
三十首歌の中に　権中納言定家
おしなへて誰かはのこしてなかめせん人のあまたの春の明ほの
題しらす　前大納言為兼
薄みとりそらをつゝきてかすめる春の山のは
伏見にて人々に題をさくりて哥つかうまつらせられけるに
水郷　伏見院御製
舟とむるあさ田の面の末とをくかすみにしつむ春の

文保三年後宇多院よりめされける百首歌の
中に　民部卿為藤
ゆかしき人々の言の葉にはみなそめくもとこそ広き道を道とぞ学
百首歌よませける中に家の巌を
今も世にありて御かきの名の松の千世ひのおりを知
らしれ　安嘉門院四条
家の例言のさかひ見ゆりおりもかの風をも見よ
前中納言定家
たち代の絶や前の世なをし世のあとの道の法にありしは
従二位家隆
権律師慈成

青葉はまことゆかし思の一方とゝがかれまさてん鳴也
百首歌の中に　前中納言定家
おもひいる道ある人はからくにゝ馬かへさきし人の法をたつね
近衛大皇太后宮紀伊のゝそれとて行けり
たえなき乃言もの言は見えてふれてならは世
有法ひつけ給ひつ　ゑ見え人しれ
かれる色を言そ言ふをさき桜の色春にかはらぬをみせられ
世に　前摂政左大臣
かれし桜の家の梅とさへみてあれはかはらぬ花もいはひつ
大江挙周つかさめしにもれて歎き侍りける比毒の毛を
見く　赤染衛門

桜ちる春とをしはや花そめに時もわかにしきはけのもりか
陰見の法華花に催まてそさそはりける
大蔵卿行宗
吉野には春の川桜は咲に流れて人こそとはめ紀の錦られ
御製
崇徳院御哥
夏人桜ひとくるかり縁のまれ人出木も春にあやなし折らは
後山寺前左大臣大将の将作して仰られけるつゐの
あつまにつかはしける　前大納言為兼
時しらぬ春とやすれはみのけしきはつれて小桜かけるらん
御製　後山寺前左大臣
思ひやは花かめかたの時にあひてゆくすゑにおもひなる花を見

法勝寺にて人々花十首歌よませ侍りけるに
皇太后宮大夫俊成
花よりもあそつ井にゆきて見れは山桜あまりをはれぬ雲と見え（雲）
題しらす
前大僧正公朝
いつまて流つ花はさかりもあけりけりなかりし山のかすみかくれて
百首歌よませ給ける時春歌
覚基法親王
吉野山花のさかりはあかなくやみなくそれなりけりみすの下道
春述懐のこゝろを
伏見院御哥
花をのみおもひけるはのすさひそいたつらに春そ惜みし紀
（前）中納言為相

たれ島にすみかへるらん山ふかき春の春とこそ我ハしらすて

山家春といふことを　権僧正憲淳

時あれハ花さくやとのさけはこそいはねの春の空

たちかへりすみかれ家に人のかよひきて住花ハか

まふ屋かとそみゆる　俊鑁

たかちのむかしハみなつもりし人の庵に春ハきぬれ

上蓮華院上人白川にすみ侍りける比山里花と云ことを

ひろき野に世のうき事をしられなハ花のたにゝおもひとさせける

藤原雅親

たれ山にすみ捨さ梅のにほひをもとにハふかき山や自身のみ

式子内親王家にて侍りける春哥の花ハちる花を

建礼門院右京大夫許につかはし侍るとて　中将

志めのうちハ身をもくたかすさくら花おしむ心を神にまかせよ

返し　建礼門院右京大夫

志めの外も花としいはむ花ハ皆神にまかせてちらさすもかな

春哥中に　参議定忠

春風の岩ねのとけて吹ぬらし波のたちあふあさみとり海の色

二条院御時殿上のをのこともに歌よませ侍りける

比盛りの十日ほと大内に行幸ありて南殿の桜盛

なりけれハ一枝折て世々に春とてもいはひあらたまの

ほかにかくしけ小枝にむすひつけてそまつりける

從三位頼政

よそにおもふ雲井の花なれはおもかけたにみえはこそあらめ

おなし御時藤原隆信朝臣殿上のそかれて侍りける
次の年の春臨時祭の舞人にてさかり侍りける
に南殿の前にて侍りけるに桜の枝につけて遣しける

馴し雲井のさくら花けふ見へは春のかへるとそ思ふ
わか世の春雨中にも見て侍りけるに

よみ人しらす

おもはすや雲の上にて我身のみ頼むもいとふかな世
おなしく後かへりさせ給て後南殿の桜を見へく

兵衛内侍

おひ行やなれし雲井のさくらもみへくすに我をあはれと

文保三年後宇多院にたてまつりける百首歌中に

権中納言公雄

わすれめやむかしみなれし桜花いまは雲井のよそのおもかけ

永仁三年三月大江貞秀蔵人になりて慶を奏
するを見て宗秀か許へ申つかはしける

前大納言為兼

めつらしきみとりの袖も雲の上の花にならふる春の一しほ

花の哥中に　皇太后宮大夫俊成

もりきつる本となりけくなまてと山桜わかつく世ハ人ハ心のこる

出家の後寄花衣といふことを

従二位篤行

袖のうへに春もわするゝ花ならてしら雲かゝる峯の白雪

寶治百首の中に見花といふことを

皇太后宮大夫俊成女

ひとめこそかれはてぬれとみ山への庵のかの花をみせ

春哥に

法印長舜

世のうきはなほこそ花もながめけれ吉野の奥もあらし

吉野の山の花さかりの御座のありけれは

桜の木の下の影を見て十かへりとまれかくもまた世にへる

とよみ出し侍りける御返し　法印

木のもとにけふ見けることも侍らは那智のうへの花咲

花哥の中に　従二位氏成

あはれなる春のあけほの花ならはおもひくらへてなほ世にありけり

散の花のすゑすゑ侍るらむ宜秋門院新大納言勝時

へのけふのうら　永福門院内侍

又七十のとしの春になりて花をみてよみける

花さへのひとつも紅葉をそみる

浄弁

人のみなえぬ身には春も知りぬらむふかくもあはれとそおもふ

寄花述懐のこゝろを　伏見院御哥

時にあひしその木の桜は世にいてて春をたのめる花をこそまて

暦應二年の春花を見てよみ侍りける

永福門院

山もとの鳥の声より明そめて花もむら〳〵色そみえゆく

落花　　　院御哥

春ふかき緑にこもる木すゑより残る花のいろそすくなき

花のいとおもしろきをみて

和泉式部

あちきなく春は命のおしき哉花そこの世のほたしなりける

落花　　　能因法師

風ふけは浪をさかまく水もなくて岩こす河瀬は花の白波

源貞頼

山桜くもらぬ空は風よりも吉野ゝ花そふりける

源貞世

ちる花はのこる梢を跡として風の行衛をしたふらん

平親清女

大そらは人もをしひこあこの嵐の風やつもる花の下の雪

帰鴈をよめる

源和義

越路さしてかへる春の雁かねの雲ゐはるかに名とおさかる

春雨

源貞泰

のとかさは昔にかはる露の宿の春雨

春哥に

源直国

春といへとむかしにたへぬ千よの松きの梢にやとる月影

百首哥の中に　　従二位家隆

おほかたも霞の氣色はたちかへりけさみる春の梢
松間霞　　　　土御門院御製
時しらぬ霞の袖はわかれゆくとしをも志らぬ春の松月
後京極攝政左大將家に六百番歌合
しらぬかに重日とらめつ
藤原隆信朝臣
霞ゆくつのくには松かけの春の日影のとけき梢にちらぬ也
春歌とて　　　　徽安門院
山のはも暗からずかりも長閑なる花咲かぬまの月はさきの色かな
山階入道左大臣家十首歌に松霞を
山本入道前太政大臣

新しうも松にもことしき春の池にまた底けく色に霞みえ
松間霞　　　　前大僧正實超
底きよき池のみぎはの松が枝にかけてぞひく春の藤波
春歌の中に　　　　前太政大臣女
山吹の花のしがらみかけてけり春は井手の玉川
この春は風にまかせてみだれつゝ花みるべきにちりにけり
待わびし風もひらけるくさの花そとはもまたれ
永陽門院左京大夫
あはれさ世のことに櫻の花のあまりにもさそふとせしは春の空
雜歌の中に　　　　前大僧正慈鎮
吹風によく心のみえて咲花の色もうつろふ春の空

百首歌よみ侍りける

源心院実日前左大臣

あつま屋のやゝやすらひて露ぬきとしるにしきの家

ゆふくれは

従三位氏久

月をまちてやすらひしはひるのすゑにかならすやはきかん

郭公を

高階重成

郭公はまつてき声をたゝきてもまちきくやまゝにそれても

三善為康

まつとしもあらぬに時鳥なくをきかぬ人はみあれは

菅原朝元

郭公なく声をきゝていつまてもあはれなるそなき

前大僧正覚忠

ゆふくれは郭公初音をまつみにしそあらん

藤原為信朝臣

さらぬたに思ひある時鳥なくなる夜の空にそ鳴らん

藤原家総

あやめ草の下のゆふへの郭公なくにそ人やきかまし

権中納言家経

まつ人をなくはかりなるみてそまつ人もなくものにそ

左京大夫長

とりのねとかくてもきみもかなしむはかりにそ待

はれゆく夕日の雲とそみれはをしからぬかな

さとかくれぬ太刀の垣明にもとも世て待つらん

よみ人しらず

梓弓いめのあとに引月影のかけもかりめらん

世代をしきてはあやめをみくらぬら

従三位寛子

今年とりえあやめさへさ身をかけぬかすかけくら経るさ庭

題しらず

従二位兼綱女

橘のかをりすゝし風にかほりてかたの軒の梢の花

早苗を

祝部成実

けふはやくとりてふ早苗とる宿は代々田のかみの宿へ

安倍宗長朝臣

松か井の水をせきいれてさみたれの岑の山田にさなへとる也

藤原教兼朝臣

五月雨を

晴まなき雲のうちよりほとゝきすこゑもかきくらす五月雨の比

津守国夏

みかくれぬ志けみも見ぬ五月雨にひきそへのこもの流の江

高階重茂

ほそからの水にまかせてあさ衣ほすてふ淵のなかれすみかの

源頼氏

夏哥中

いつしかと夕立すゝし道のへの高楊枝にのこる露ともしら

惟宗光吉朝臣

題夕立

富士の嶺はさきに晴にあらはれてすそ野にかゝる夕立の雲

五十首御哥の中に夜寒

伏見院御哥

夜寒なることし世よみてねせてもよそ猶遠き道をしそ思ふ

山家晩涼といふことを

前参議雅有

夕されは宿のさし末風の音して夜ふかけてすゝし山の奥

夏哥の中に　よみ人しらず

むら雨は晴ゆく跡の山陰に露吹おとす風のすゝしさ

源貞頼

山すそに日影をよそに木隠(陰)の水のおもてそ夜は涼しき

題しらず

儀子内親王

世中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿そなくなる

述懐百首哥の中にしかを

皇太后宮大夫俊成

小野殿にて人々よみ侍りし百首哥に

前大納言為家

又見めやことしもさりにもむかし麻やりあはれ思ふも哀世中

題しらず

従三位基輔

秋ちかき草のしけみに風たちて岩すゝしき杉の下陰

大江貞懐

木陰ゆくいさゝ小川の清水の底きよくうつるみえりの涼しき

藤原秀能
一むらの雲吹をくる山風にまたれぬ空にすゝし夕立の跡
惟宗光吉朝臣
秋ちかき宮の萱か軒ならてせをつゝむ人の枕なりけり
貞覚上人
岩井の水の底の白砂も見えてすゝしく秋のまつかなきさ
河原院にて清輔顕昭等歌合侍りけるに旅のこゝろ
ことゝいふ事を
藤原隆信朝臣
ふるさとは難波の里人と夢にてや清見かたにやすらふ夜のゆめ
七月七日亀山院より七夕歌めさせ給ひける時よみて奉りける
後西園寺入道前太政大臣
昔我袖にかけしはなれし今年とりつる草の上の露
おなし心を
藤原秀行
銀河とわたる舟の足はやきさかりにて一葉とみゆる契そ人
高清師名
天河待わたるらん船もなきにいはのみや思ふかさ星合の空
寛喜世間安隠御年といふ事を
慶政上人
まつ僧の手もとまた人の枕風と見しまつなむ神の言露
題しらす
兵皎法師
志からも又秋の露のたえまや拂ふ庭の小萩の末そ〳〵
式部卿久明親王

おほろその松乃あらしもあらしにそ松山ともなとのしたの葉の露

大江貞廣

物ことにかはりてなせる君なれはかすかなきよの松のみとり

和氣全成朝臣

日數へてふる雪の葉にかゝるらくもかはらて松の茂れる

前権僧正良快

なかきよのためしに千世の松の枝をうつす人ならの葉の色をかへよとそ

賀茂重保

万代を松の風の音にこそ君か千とせをしられけれ

松述懐といふことを

前中納言為相

春の松まつ康之志らへをきて通のこゝろをそ

松竹あまたよみ侍りける

順徳院御製

秋の色を今あひの緒に吹まよふせてのこの松か枝の色

伏見院御製

田家乃松

けふみれは田のもにたてる山さとの猶雲にかゝる松をそ見る

閑中松

貫之

松乃音も神さひまさる松風は閑のことやすきてこそあれ

松竹乃中に

後京極摂政太政大臣

ふかきはしに松にうつる入日影山の松かせ雲の梢

権中納言長方

入日さす浦にうつりてこの松原に雲吹からむ松の志らなみ

百首歌奉りし時　　前大納言為氏

秋風にうつろふ雲はちりもせて夏のなごりのおかれ残る雁の一つら

題しらず　　藤原頼清朝臣

たえだえの袖のあさ霧はれそめて山の端わたる雁の一つら

藤原宗行

月出る秋の稲葉の露ながら山のはちかくみえてわたるかな

秋夕を　　中原師夏

嵐ふく音の空は雲晴てよりく残る夕暮のむら雨

題しらず　　平貞時

夕されば秋の萩の音絶て桐の葉おつる庭の秋風

明遍法師

空はなほ秋の日数のうちにしも霧にそめける庭の萱哉

藤原宗泰

すゑの露ややはらん木末は霧晴て夕日にかゝる浅路の末の山

前大納言為氏

秋風に月のかゝれば大空に吹きはらふ雲の梢よりまに

後宇多院七百首歌に駒迎を　　権中納言公雄

いまぞひく雲井のにはの秋の夜をたえず見ゆる月の駒

秋夜七百首歌に湖月を　　従三位為親

さゞ波やしがの浦の秋風にうき雲晴て月ぞさやけき

月前乃中に

前大納言為氏

ちゝま山ぢの小月をかさゝて吹おろすのゝあらし冬そ立ゆく

津守国実

尋そに秋の光よそや旅の月深くは霧の外にさへ汐みん

賀茂経久

無人の秋の深き物の音あれくさし入月の影ぞすゝしき

藤原為守女

この比は月の光を旅ねそさむき心を初秋の声のきさはい

藤原為通朝臣

雲の上よる旅寝の月そ志のびつゝ我世とけゆく秋の波よ

和氣種成朝臣

おもひ出る昔の月ぞ思ふらん流れも清き明はてゝ

丹波長典朝臣

身の程を汐世をそれみる月や秋はふかき露もなく旅寝ん

法印源全

年をふる思ひみよこそかくてそのかきの秋の旅寝のかつ月

貞永元年八月十日より中宮の女房さそひて

東山にまかり侍りて水の月のうつてくまれる

光明峰寺入道前摂政左大臣

大

さえわたるいまのえあらそみちはふけゆく月にみつはれ

返し

後堀川院民部卿典侍

立かへる袖には月の志ばしとふ石井の水にあつめひかれ

讓持たりける比月残りなく

二品法親王尊胤

いのりきそはかなるひの枝とやさへかく三とせの光みる月

百首歌奉りし時　入道二品親王貴恵

かくてこそみるへかりけれ世をすてゝむかしの庭りすめる月かけ

雑歌の中に　儀子内親王

見きてもなれぬる月の影さへ親とみえくもなき秘さまらぬ世

丹波忠守朝臣

枝はむきあらぬものゝ一時あらは秋も月の光なからまし

山家を　恵助法親王

いとひこしうき世のほかの山里も月にいつまてすまれはん

世のうきをはなれて住はおもふ身のすみけむ

藤原為冬

すみなれてそこともなき月ならはさすかにそれは秋の枝

前大納言

到てみる月そ志のふ人をそ人なきあとの秋の空

延年五年内裏の御屏風月歌よみの家に

おとこいてゝもの心ありそ知いらせねは

忠光

山かたにいりぬるとも月をみて秋えとはあらんとやする

女房

又空の月のさかりにくる人いつてもあかしとそおもふ

ひとよならぬは　寂然法師
ゆくとこそおもひしれきと詠てし夜の月を切てもすみけり
なりはてゝ待し月をみく
太宰大弐重家
月影のたゞみしよりも定俊への[illegible]の風にも[illegible]
俊恵法師
月前述懐を
なほ世にはありてかひなきおもひかなうき世の[illegible]月をみるらん
月御寄述懐
土御門院御製
[illegible]とく神の霧をはらはれしとを[illegible]秋の夜の月
従二位家隆
昔をはおもひしらるゝおもひ神の上に雑として月[illegible]らん

月下送客
伏見院御製
人をかくゆかせ給ひつる雑月を
あかなくてたちかへるすゝのすゑの雑月の影にのみ
寄月雑といふことをよませ給ひける
院御製
雲の上に見しは月の洞をすむ月の浮世にかけはなれぬ
従二位[illegible]大臣[illegible]
世にすむかなしきもりのさかの秋の月
賀茂雅久
あはれ世のきぬの岩にいひ雲も[illegible]の家[illegible]
雑歌の中に
前大僧正慈勝

嵐ふけは庭のもみちは苔のうへに流てそひく森の木の林
紅葉を　祝部成国
一しほにそめて行てはふかく時雨にうきは山の紅葉ゝ
秋哥とて　慈円上人
いつはりのすゑの時雨ひとふるもみちもいつ秋の暮
落葉の心を　大江千里
山さむし嵐も落葉と流るゝも桂の葉さへそはけ朝霜
梢より流さへ里の時雨かなきのふ十月百
みちのく　和泉式部
いつ時雨ひとしくそむけ時雨ふりくる時雨はいまは何をせんと
落葉にて　藤原為頼

冬のひ一もとまたけさひく時雨にいろそふ霜の松原
祝部成国
吉野山梢の峰の時雨ふくかゝる月もみゆる紅葉ゝ
落葉の時雨といふことを
前大僧正賢俊
神無月志くれぬ時雨ふる紅葉ゝ色なくさはなる嵐なる人
冬哥の中に　二品法親王[illegible]
おち葉する枯の木かけにとめしを又さそひゆく森の下風
閑居冬夕を　従二位為子
吹ひゝさよ梢の落葉は風にちりて人の音せぬ窓の苔
風前落葉といふことを読ませ給ける

後伏見院御哥

あしはらやしけき葉のとちめ世にかくれなき

神な月の比忠恩院入道前関白もとへ申事
侍とて侍りて侍れは返事にかくつかはしける

慶運上人

なき庭のすさましき末のかつらをもそめぬらん人も物かは返

読しらす

新はきも花のかつ思ふのみもすゝしき秋の

守子内親王

風わたる野原の萩の花もとかくれ葉ハかけを

藤原高範

百首歌の中に野を

安嘉門院四条

むさし野はみ風の末のしら露はとゝまるかたもなき秋かな

江寒芦

よみ人しらす

みなと江の秋のそのほの葉の露さやかに風そ吹

冬月をよめる

前権僧正

清き月の霜夜の更るにかすむ心も月のかけ

読しらす

かれはてし志かのみ世は風さえて月のかけさえ

冬哥の中に

法印宰承

冬の夜のあけかたちかくなりて日影のさし雪の消えゆく

猶従二位清子

浦雪を

惟宗忠貞

難波かた入江の雪は波の色にながら跡たえてかさなる

文保三年後宇多院に百首歌奉りける中に

権中納言公雄

唐土もおなじ山路の雪もさぞふりてふりぬる身はなほ

後伏見院小山御時に御会ありて人々詠みけるに

まつりける時雪を　今出河入道前右大臣

かきくもり降りしく雪をあふくにもかしこき代々の山里

法印快懐

玉津の道ある御代にふる雪はむかしの跡をたづねつつ

藤原為量朝臣

春まつとはなかりつる橋は雪にたえしわが宿の埋木

後照念院関白太政大臣

ありあけの月もさえゆく道の上にふりぬる空の白雪

冬歌の中に　太上天皇

降りつもる雪の白妙ふるさとの雪ぞふりしく山の陰

順徳院御製

千鳥なく浜の山風さえてみなとの浪に雪ぞちる

前権僧正道勝

さゆる夜の入海かけて鳴千鳥月にとわたるあまの釣舟

後宇多院七百首歌に　浦千鳥を

前中納言有忠

浦風にいりて浦千鳥あかなく月のかげに鳴くなり

松間人家　　紀行春

[illegible]

冬寿カ　　菅原成藤

[illegible]

藤原基雄

山川の[illegible]

海道百首の中に歳暮を

後猶朝長

すみよしの[illegible]

煙火

[illegible]

歳暮を　　前権僧正静仁

[illegible]

前権僧正雅

[illegible]

冬歌の中に　　慈道親王

[illegible]

歳暮の歌とてよめる

前中納言為相

今年は[illegible]

世をそむきて後山里に[illegible]

[illegible]

藤原為基朝臣

山人の折る道も見えぬ志らくもや峰の葉を(?)わたし

百首歌たてまつりし時春歌

永福門院内侍

去年見しも又いかばかりの春の後に ゆつりてきなる

春も浮世の

風雅和歌集巻第十六

雑歌中

暁雲といふことを　藤原為基朝臣

あけぬとや鳥も鳴らし松のわたれよりなびく麓の白雲

文保三年百首歌中に

後西園寺入道前太政大臣

みねのかに小夜ふけて浮雲のあるゝき雲のむらさめの花

百首歌奉りし時

左近中将忠季

時うつるや暁ちかく成ぬらむ雁なき行の空も志つけし

雑御歌の中に

今上御製

夕日さす浦みて見る明る(?)の影うつり志てきえ残る小山の端

康永二年哥合に雑色を

院御製（一條）

志らみまさる空のみとりハうすくみえて明残る星のかすそきえゆく

暁の心を　祝子内親王

山ふかミおりゐる雲ハ明やらてふもとにとほきあかつきの鐘

雑哥の中に　太上天皇

夜鴉ハたかきこすゑになきおちて月しつかなる暁の山

従三位親子

かねの音に夢ハさめぬる後にしもさらにさひしき暁のとこ

進子内親王

言ちるき水たの霧たちのほる岩ねのあらしのそらの竜

吹きこえておもふ鷲をみらめりおしうらに暁の鐘

春宮権大夫公蔭

おきあかす寝覚の床の隣みてのこるともしひそ我さひしき

百首御哥の中に　院御製

拝きてねくら鴉の一こゑにむつの空たてあけぬなり

徽安門院一條

立そむらかに鳴帰るねく林ちかくゝの松の絶

前大納言實明女

朝けすゝむ枝にすゝめの月ハ影かすむ空の霧

光残さえてそ哥ゆきのつれに雲とおなし

とをみせ行ひく

伏見院御哥

あふ坂やゆふ川きりにたつ馬の声しつかにて関の杉村

百首御歌の中に　院御製

里とほみゆふくれとはいへとけふのとに声もむかしの山のまつ風

藤原為基朝臣

出る日のあとより朝日のかけのあはれ山の雲そ出てさしそめぬる

朝煙を　従二位為子

庭とりのよそにかすむの末あひく一むらの雲は里わかれ

百首歌奉りし時　徽安門院一条

遠かたの里は朝日にあらはれて猶霧ふかき竹の一村

前大納言実明女

風すさふ竹のさ枝の中流日かけうつりさためぬ秋そさひしき

あさゆふといふことを　前大納言為兼

おもひつる宮よ一もとり日影みえて我もかれとや松の夕風

雑御歌に　順徳院御製

入日さす峯のはの雲きえてはふかつるの一点

太上天皇

夕日影田面はるかにとふ鷺の翅のすゑに山そくれゆく

儀子内親王

山もとは先暮そめて影うすき梢まのこる夕日影かなれ

夕山といふことを　後伏見院御製

ゆふ山やふもとの杉原さきめくのこる日影に霞にほひぬれ

百首歌の中に　中務卿宗尊親王

忍ふ夜は雲まの月影ひとりむかしかたらふ山の奥

雑哥下　　徽安門院

世に白波ちる庭はみなとよりみえてけふり山さえわけて出る

百首歌奉りし時　　左近中将忠季

夕暮はひ入ぬる嵐の色に残りもそめて松たえさひしき

百首歌奉りし中に　　順徳院御哥

桜咲く白山乃あたりの千歳まて雪乃たえそそ色かりけり

雑哥上　　院一条

山かけの夕あけの雲ふきたえて入日の後の空そ志つけき

徽安門院一条

秋の夜の長き入日の後は浦の風そ月見るかたに雲乃夕船

月を見はしる人さへも立ちしき松風もひ残る秋の夜　　源義詮朝臣

從二位行家

人しれぬ苔乃した庵の露けさにさそかつまし夕暮の山

山風に雲乃夜嵐そ夕のそらたまりぬる

暮山をよめる　　前大納言尊氏

百首歌奉りし時　　民部卿為定

たりぬる世のひかり吹なく嵐より入あひの子

前中納言重資

雨にくもる波の音つてに落るひくき雲ぬるなりゆく暮の山

題しらす　　後伏見院御哥

鳥のゆく夕の空のはる／＼となかめの末に山そ色こき

藤原為基朝臣

吹わたる遠方のゆく鷹はよそにて色残るかへる空

夕鐘を　伏見院御歌

鐘の音を一つあらしに吹こめて夕暮しほる峯の松風

年ひくる松かけそては静かなる嵐のおとに鐘ひゝくなり

山のはのなかめにかはる夕暮はきこえそきこゆる入相のおと

祝子内親王

流色く晴あくて入日の入逢のかねのこゑきこゆなる

雜御歌の中に　後伏見院御歌

暮入山ちの末はへたてあるひの鐘に風そかよふ

永福門院

かくてこそ昨日もくれし山のはの入日のあとにかねのこゑす

従二位為子

なかとはゝ夕の色をみるまゝにあやしきまてはうらさひしさ

後鳥羽院御歌

何となく過こしかたのなかめまて心にうかふ夕暮の空

伏見院御歌

寺ふかき林覚の山の峯のせく夕霧のそとに鐘そきこゆる

儀子内親王

清くしとひゝきて秋の雨の音は降やむきはにかたひなりけり

嵐の入ひとめる夕く鷹羽玉のうそに附も世はさみしき

姥とも見え侍らん　　従一位教良女

忘れじと何にちかひし我身のとがにしも

寶治百首に秋燈を

前大納言為家

あかしかね月を待むかふ灯のあかりとはいはゞよわりはてなる

雑哥に

前大納言長雅

すゑの世の風におよはぬ言の葉をさらに思ふとも

微安門院

思ひやる心の雲の上までも人にとはれぬ身の哉

月哉

後伏見院御哥

一とせのおもひやりつゝ見る月そ誰

うき人もなし

世中にむなしき物とあるむかしの今もなを

月のおもかげをみるかな

大僧正覚

あかねさす世をめぐるかひもなき月も身のおもひぞ哀れ

哀ねりて後の月をみるかな

藤原教経朝臣

むかしのとなるむかしも難し雲井の月やみぬ

思ひおもひて後の月哉見えぬ

前参議家親

いにしへは君又見しきこゆるにもてなされし雲の上にも

雑哥の中に　　如願法師

神のよにかはらぬ月のかけなれはむかしにかへる此影と思ひて
なるよとむかしむかしおもひき我神のみちよりそてやらん

従二位為子

時ありて花も紅葉も一さかりあはれに月のいつもかはらぬ

大峯修行の時よみ侍りける　　二品法親王覚助

らゆくく河霧まよふ山風のをとはふかき木の葉なりけり

雲を　　永福門院

山あひにおりしつまれる雲のしはしとみるまにはや消えにけり

前右衛門督基顕

うきて見し山の峯とみつるほとに雲ゆく雲の行衛しらすも

雑哥の中に　　前大納言為兼

遥見えにあまたおりゐる雲のゐるかたにつらなる遠の山そ見えける

従二位為子

あかき雲のそやまみほとの庭ひとえを見わたせは遠き山の端

百首哥奉りし時雑哥　　入道二品親王法守

枝くらきこすゑの森の奥かけて遠く霧おりゐる梢の下道

五首哥合に雑遠近を　　太上天皇

雲かゝる遠山松はみえくれて籬の竹に雀なくなり

永福門院内侍

なほ残る峯には入日うつろひて山のさきゆく夕暮の雨

雨晴ての後と云事を　後伏見院御哥

ひとりあかす閨の思ひきてこそあれこれはしらする夜はの雨

雑御哥の中に　後伏見院御哥

夜の雨小やみになりてさ夜ふけて風の音さへしつかにそきく

元久元年七月和歌所詩哥合に山雨を　大蔵卿有家

み山木のかりにみえさひ峯の雲の山の雨に[illegible]

題しらす　儀子内親王

山あらしのみおとしてさきてそこはきえしきのたそかれの雨

藤原親行朝臣

虹のたつ峯より雨ははれそめて麓の杉のかつしるき雲

藤原公直朝臣

雨はるゝ色は[illegible]松山の松にかゝるしら雲

百首哥奉りし時　永福門院

雨はれて夕日さす山の下をりの[illegible]

題しらす　藤原為基朝臣

山もとや雨はれの[illegible]里の一むら

従三位親子

夕暮やまたくみえて入日さしくる山のした道

雑哥の中に　進子内親王

[illegible]山もとの里のこゑ[illegible]

あまた百とせに山を　後山本前太政大臣
白雲乃八重たつ峯もちりひちの積りてなれる山としらすや
思しれは　前大僧正慈順 鎮イ
三乃峯ふたつの道とあふきて我たつ杣の名をそたてし
雑歌乃中に
後鳥羽院御哥
しら風やみなとの葦を吹しをり夕暮しろき浪の上かな
後二条院御哥
浦乃雲のこなたにみえて志つむ日の名残の浪を志つくらふ
永福門院
志川尻てぬ入日は浪のうへにして塩干にいさる紀伊の松原
藤原為基朝臣
磯山乃けはひの海をみわたせは夕日にみゆる松か浦志は

志つかなる外山の梢うちなひき吹かへる風そ身にしむ
祝部成茂
浦のまつ浦風吹よる夕波にゆられてみゆる月のつきかけ
藤原朝村
院兵衛督
うらちかきあら磯波の浪よせや塩干の方に打のほるらん
眺望の心を
前中納言定家
波のはら浪と見えつゝ入日かけくるゝ遠山のすゑの道
藤原為経朝臣
浦人の磯山かけを葦わくる入日のあとにみかの松原
掛ゆくあふ海のほとりをゆく

読人しらす

風はやみよせくる波にいさりする海士をとめこか裳のすそぬれぬ

題しらす

玉津嶋みれともあかぬいかにしてつゝみもてゆかん見ぬ人のため

家つとに貝をひろふとおきへよりよせくる浪に衣手ぬれぬ

ありかよふ難波の宮は海ちかみあまをとめらかのれる舟見ゆ

寳治百首に江蘆を

山階入道前左大臣

難波江は冬かれと成みえねともみきはの風に吹まさるなり 三

津の国に侍りける法師京にあひしりたる人の許に遣しける

冬の夜にこそ侍けれ　津守国基

ほのかなるかたふくらん枕にもあれてなほ夜をあかしかねつる

題しらす

光明峯寺入道前攝政左大臣

津の國の難波の里の浦ちかみまかきを出るあまの釣舟

前中納言為相女

あしたつの松のはかけは海ちかみ汐みちくれはなみそかゝる

従三位行尹

たちかへる浦よりみれは波間より住よしの松

日吉の社にてよみ侍りける

従二位為子

かゝ湊やかとしにみゆる浦のあま小舟

雜哥下

前中納言有忠

このかみの浦やうちとみえ(?)しかとのきはみえぬあまの釣舟

従二位家隆

しほかせにさそはれ松の木のすゑも色ふかみゆく海士のつり舟

前中納言基成

浦人のかすみにまかふ沖にこそほのみゆれいさり火

従二位為子

出る舟の浜まにかすみてぬ追風やさき浦のつり舟

前大納言為兼

物としてはなかれてゆくはきえぬ水にうかふ舟もとまらぬ

従二位兼行

川もひとつあらきかなしかはいつくも舟の音そきこゆる

百首歌たてまつりし時雑歌

右内大臣

昔をはかくてのこれるもまたこもやかはりのなからの橋

題しらす

前大納言為相

大井河ちとせにみゆる橋のうへにゆく人たえぬあとの名もなし

嵐のやまもひとむね松たかくふもとの里も千代のすまひ

藤原為守女

昔ながら松の千代川千代をとめてかたみの嵐もかよふなるらむ

従二位宣子

山人のおのへのはしのなかきよのいまもかはらてゆくはかなしき

従三位親子

浦遠く此山陰まて続く覧の末も続けりむしろ松の一もと

前大納言為兼

みねとふきさひしくれはしらむ細の雲のみちなき

又松といふ事を

伏見院御製

いかにまた浦の嵐の浦に吹くらむ松の中にも山の山

百首歌奉りし時

権大納言公蔭

年ふりし松のこすゑも知らさらむこきまつは文和なりけり

雑歌の中に

浄妙寺左大臣

若みとりひさしき行のむしの在所にしるや奏さらむ世

康永二年歌合の雑歌といふ事を

徽安門院

みとりこき日数の山のまつかせにふきまよふ浦の白露

法皇御製

伏見院御製

山もとの田面よりたつ川霧の中にそみゆる松の一むら

雑歌

前中納言為相

若緑やこふきたるにつくろひてあるをしるをも山の松の色

従二位忠嗣

鶴の声をよそにきこゆるねよりも山のあるさき知る松のみの色

家長といふ事を

正三位隆教

吹おろすも嶺の山の松世にもさそみえさらむ年の通ひ

承元四年中に家松

前中納言定家

志はし世をすてけん身よりやまさとの松を聞てそ分ちき

山家の心を　　　後光院入道前関白左大臣

松の風雲ゐのはやしに吹かへて空この人の声も聞えぬ

山家　　　権律師慶運

麓の明をまかひしよる明き白雲のうへにそひく山のかけ鏡

野亭　　　藤原基任

山ふかき住井はいかにわひぬとも我もかくれぬ浮世ならはい

権律師兼成

年へぬる宿をは人のあれしめて苔むすみちのあらし一声

嘉元百首歌に山家を

前大納言為氏

山さとの松のこすゑのあまりにも嵐は志るく吹てゆけ

雑歌中に　　　権中納言俊實

まそひとはあはれからくす栗の住いとふ世をのみ志のひてそ

式子内親王

我宿は誰未ふれし山川の志らくからくすみわたりして

山家松風　　　西園寺前内大臣女

ふりにける嵐の音はいつまても身のかくれかの峰の麓松

百首歌奉りし時　　入道二品親王法守

山のおく志つかにとこそ思ひしにあはれそさはく峯の松風

世をのかれて山ふかくすみ侍りける比

山本入道前太政大臣女

又人の庵りならぬ山住の声すゝ風をまさにときくかれ行を

前権僧正良瑜

一すちにおもひくらへつ呉竹の庭にみなれて志けりなへ

六帖の題にて人々によませ侍りけるに山さと

伏見院御歌

住なれぬ岩木を庭のすさひにてなほやつるさき山のおもかけ

題しらす

仏国禅師

家ゐせりしと思ふ峯の庵まてたちもこぬ八重の白雲

山家夕といふ事を

伏見院御製

山かけやちくさ入逢の鐘の音に知る峯の苔にまよふむら雲

百首御哥に

院御哥

住そめて入る山の雲かくしゆきてはおなし都なりとを

無動寺に籠山して侍りける時源恵民部卿為世許より申をくり侍りける

前大僧正道玄

尋ゆく我すみかとはいはし人の中のすゝめのやさしき心

題しらす

藤原宗秀

此身をもすてぬ住家に住みてみる山のおくはさらにすまし

前大納言家雅

松山の岩ねの苔をむすかてかゝる人の家の中

寳治百首歌に山家水を

安嘉門院高倉

人めこそかれにし風もたえぬ山里にかけひの水の音をそたえせよ

題しらす　　　儀子内親王

こほりやとまる海はいかにさひしからん人めは絶ていとゝあかしの浦

二品法親王承覚

松のはゝ松のうけひをつてひきされ庭もさなから音のつゝ水

山家乃御歌に　　伏見院御哥

そむかさる山は名のみのけふりにて竹のあたりの雲は霞おほふ成けり

雨を　　　進子内親王

雲ゐ川春雨乃松本の雨の音きゝて到れぬるゝ乃こゝろをきひさ

雑御哥に　　順徳院御哥

雨すさむおり山のかたのこさそすゑを宿の和哥にわくる桜橋

前大納言忠良

山本寺乃いほりの雨のふるをそとせてかたる夜はの月

百首奉りし時　　前大納言實明女

山里ハさひしとなり花を待をそ緑とそめてみるへやなかれ

田家をよめる　　前大納言為氏

やまかけやいなかのさくら雨かれて田のもにさるゝ雨のかけ

寶治二年百首奉るへきにつきて御歌につきそよ里

竹を　　　後嵯峨院御哥

君ひくさかの里のたかきえそ浮世てへらぬ空をしるしれ竹

都出の春暮寺よりくらかたつに

二品法親王慈道

この里ハ和尚のさしまそけ宮ハひとりしあめ雲水の色

題しらず　院御製

沖の風磯の家居の竹の垣ふく夕の音もあらくして

寶治百首歌に山家水を　山階入道前左大臣

我住は山の井なからひとつ水あらはれて見ゆる岩間の水

文保三年後宇多院にたてまつりける百首歌中　後花山院前内大臣

庵むすふ山のすその水の音に十とせあまりも住なれにけり

千首歌よみ侍けるに　前大納言為家

あはれなる峯の嵐の打はらふ[illegible]

山深み[illegible]

藤原為基朝臣

月はなほ[illegible]山かけにかゝりて見ゆる杉の下道

百首歌よみ侍けるに　従三位頼政

いつも山[illegible]

山家鳥

山かけや竹のあみ戸に入日うつりて[illegible]

伏見院御製

山路の心を　従二位為子

やま人の[illegible]下道

樵夫を　中務卿宗尊親王

[illegible]

前大納言為泰

志けるさ野の道のくまはゝ月まち出てくる山人
婦きし山河とふ人のあとくもなくそなたにとはゝ
あきれはりけり
前左兵衛督惟方
人ならぬ鳥もこゑせぬ山河にもあはれは待てもおかしき
東山に十月ばかり従三位頼政か子ともを
かきくしてをとせさりけれは法師まうて
いふて野常清水のあひ出てやとりけるに大殿ねらん
筆のいたそまてうりてしらみ見給ふ歌
静仁法親王
人なとあはれ露の紅葉の被かりに見る岩屋の苔のひまの雨
藤原道信朝臣
難井といふ所にて

秋かあ人はきくすれとも宗法師ひとさら玉井の水
高野の奥院へまいる道に玉川といふ河の上に
よ毒虫のおほかりけれはこの流れをのむましき
よしを志めしおきて後よみ侍りける
弘法大師
忘れても汲やしつらん旅人の高野の奥の玉川の水
松か枝の山もとに住侍りて河水二乃松枝見て
阿一上人
あはれこの浮世の中をすて志て我こそとおもふ桜
白河なりける家に十月ころ人々まゐりてはなまかりてよ
見侍りける
前左兵衛督惟方

当山の大僧正の許に志て小さつりさて学の庵りと成けれは
大覚寺なり十九給ける時よめる

二品法親王寛尊

年経つゝ苔むしにけるの山末を住し流もあまとも

雑歌

藤原為守女

泉川氷りの底となりぬるにまた絶えすめくるかはぬる道

いほりをすてゝ移て出けるなり

夢窓国師

いくたひかかくすみすてゝ出つらん定めなき世にむすふかり庵

百首歌中に

前中納言定家

蹊のの秋池のみきはに松かせて数のかれいらぬをすれ

長和五年四月宴のことゝもに出て小大納言経
行川にてけし侍る

権中納言定頼

八重葎志けき宿に渡りても人なきあとにあるをこそすれ

風雅和歌集巻第十七

雑歌下

題しらす　伏見院御歌

あま川空てらすの志るしにあらはれてかみのまもりの末の代まてや

雑歌の中に　太上天皇

てりくもり寒さあつさも時として民にいかやかやすまんまなき世

百首歌奉りし時　権大納言資明

誰もみな風のなみにけ人をたのまぬ身のかりの世を

述懐の歌中に　左兵衛督直義

しつかなる夜半の寝覚に世中の人のうれへを思ふくるしさ

光明峯寺入道前摂政左大臣

神代より道ある国につかへける契もたえぬ関の藤川

右大納言経顕

いかにして代々につくさむ白河の水のみなかみ水の心は

雑御歌の中に　後伏見院御歌

あらきみる我身をとへはあまのかるすゑの緑のいとまなき世

前大僧正道玄

此里まてもおさまれる代のしるしとて月のいつくに住よしの里

源院関白前左大臣

此身の道は海のはて春日のかけの朝日のかけもさしそへてく

文保百首歌に　光明照院前関白内大臣

今日もなほ三かさの山の朝日こそ宮ゐしつかに志るらん

雑御哥とて　後醍醐院御哥

いおさまれる跡をそしたふむかしへる君とはしらせまし

百首哥の中に　太上天皇

おさまらぬ世のための身そうれはしき身のためならぬ世をおもふとて

嘉慶二年十二月従三位の位上に叙して慶を奏し
けるに雪いみしく降り侍りけれは

従三位為継

位山かさなる雪に跡とめて猶よろこひの道はふみみき

山を　藤原秀経

道しあらは海をもまよはし位山むかしの跡は名のみさや

百首哥奉りし時　前大納言實教

老の身はいま一しほのくれなゐのふかきにそめてかへりける

雑御哥の中に　伏見院御哥

然はたのしきものをまことはいとかくあるへき世そ

藤原為子

なにはのゝ身はうきものをそへてかくあるへき世をはのかれと

法印顕範

かくてまた世はけちのよそにやしらぬ身をかへる

藤原重綱

人とはしかさなれるの理水の庭にすむ

百首哥奉りしに　藤原為明朝臣

ちゝあるにはかなき親のそかくてはたき世なれ

雑哥よ　　　　　　　　　　　　徽安門院

身をしれはあはれをしるそうき世の中ににこりてもすまれける

慈應和尚の徽号を申給りてよろこひ給ける

皇慶贈法印慈應の謚号也

入道二品親王尊円

谷川乃名のみなかれてうもれ木のこきをあらはす見し人

題しらす　　大江廣秀

水上のすめるをうけてゆく河の末まてにこる名をはなかさし

百首歌奉りし時　　左兵衛督直義

しつまれる四方の海まてちかひし我身にかはる君か代のため

中納言にて大納言の時にうつり侍りける

前中納言忠相

のりをしる跡のかたはかはらねと今の世にこそうけつかれけれ

文保百首歌に　　菩提利華院前関白内大臣

世をすてゝなけきしものゝ身の程をあはれとも思ふ世に

世はかはりてもあはれとそ思ふ　建武の比世をそむき

ら入侍りけるに

おもはすも身のうきことをうかりしにすてし身を今になけくや

題しらす

源氏雄

旅とはかりおもひなしても我身の道よりおもきなかれありけれ

百首歌奉りし時

入道二品親王尊道

百年ものこるやみちの行末のちかうてさへかねてそおしけれ

雑哥下

西園寺前内大臣女

すみ侘てこし世をすてゝそむかれは月は身にそふ山のはもなし

なき人の墓にまかりけるに衣笠内大臣と

ひそかに侘ぬれはなかく流れて 寄

慶政上人

なかにこそ我世ひとりと思ひけれ父母の猶嘆をは捨かねき

我山にすみ侘たりしに東へ出ける時草庵の障子に

かきつけける

前大僧正道玄

いつくにも又かへりこんと思ふ身の何ゆへいまさら枕残るらん

述懐歌中に

弾正尹邦省親王

すみなきを世にかはしのなかれさめて昔ある身としをそ恋しき

前大僧正守誉

いつまてとおもひかけりそあかて世の夢をよそにきく身そかなしかりける

権律師有淳

世の中のうきはたれゆへなりき物そとは思ひ捨てもひまかせん

如愚法師

あはれ身の世はかりそめと思ひしにうきを思ふの涙なりけり

源宗通

なけくへきことは我身のうきよりは涙のなかに思ひ出つる

皇太后宮大夫俊成千載集えらひ侍りける時申つかは

しける

前左兵衛督惟方

ことのはを草のかきつめなから和歌の浦の名のそれ人なにしらぬ玉もや

をし

皇太后宮大夫俊成

今よりは秋(?)はちとせまちぬをかけさらめやなにはの浦波
範光(?)　　　平久時
かはらつりのつりのうへてあふくひとまちにはさいはひ千とせ和歌の浦波(?)
　　　大江宗秀
和歌乃浦よいにしへ世々をすまとよりて流れのすゑそ昔(?)
賀茂重保か寺の障子に時の歌よみともの名をかきて(?)
聞しそとのくらゐてうたを名乗のうへにかきつけ(?)
ト侍りし歌のあひ(?)もかくいふ人とあひ侍りけるに侍る紀人(?)
名をまかりてかえらしけるはこゝろ書
てなかれとなく
　　　後法性寺左大臣
和歌の浦のもくつの数よいかはかりかひなかれさるらん(?)

皇太后宮大夫俊成けふ(?)よとて忠盛朝臣家を
たち給ふにのこりてとて
　　　平忠盛
家の風ふくともみえぬ木のもとにかきおくことの葉をちらすな
百首歌奉りし時　　左兵衛督直義
言の葉の花のさかりにはにほはせよみよしのゝ道
基俊か古今集をかりて返すとて
　　　皇太后宮大夫俊成
君なくはいかにしてかははるけましいにしへ今のおぼつかなさを(?)
返し
　　　基俊
かきつむることのはをみてたれも昔の風をしのはん(?)

和歌みつすぢの哥合とて前中納言定家に判
をこひきらし申ける紙にかけりて其奥に申を
あからさまに申給けるに判してかへし給とて山水の
ぬかるまじとて老かりし紀の春に春をもむすふかなと
申て侍ける返事に　和歌法師
むすひても(ゐすい)またかへしぬるかなみゆるを山川の水
建保三年内裏に名所百首歌奉けるに
辰市　　前中納言定家
哥論のみちに秋をしる人の市やいさ辰の市や知ぬ風情也
貞治百首歌たてまつりける時海舟を
前大納言為家

わかの浦にあれそふ波のあまさへと世にまかせける所をもたて
従三位頼政正下四位に叙して侍ける時よめる
ひいてつれとて　　藤原隆信朝臣
和哥の浦に立のほりける浪の音にふたつの浪もわかれぬる嬉し
ぬし　　従三位頼政
いかにして立のほりけん人しれすおもひよらぬ和哥の浦浪
おなし人高倉院の殿上の還昇をゆるされ侍ける
ふみにつかはしける　　清輔朝臣
立かへる雲のうへまてつたひける思ひのさはるには嬉しかりけん
梅田仲朝臣蔵人になりて又の日清水にまゐりける
大宮人とまへる雲井そ思ひしるへきとよみて侍る

世中に　　大弐三位
ありけるに雅風すむめるはかりその名井につきぬや
高倉院御時世かはりこまやかにくもりぬ給けり
ゆるされぬ殿上をはいまゆるさりける参せよ
此おもひて蔵人平明のかつらけり
太宰大弐重家
義の中絶ととかいふ道の名を世井にかやうにぬ
后清水時祭の舞人にそえり風をありける家
あり又五年春を詠へきよし仰かれたる所にやあり
けん　　藤原定長
又五年春とはえそいふれなまことをありかなき世

六条院位をおりゐさせ給ける時臨時祭陪従
ゆるされぬくさりて生涯にふかきやありなん扇
乃御ちかきて中宮の御方の女房のなかより
とらせける　　清輔朝臣
むかし見し雲の上橋あれはてと秋かはりぬとも
世をのかれて後大納言三位より琵琶の譜をもとめて
くもゐならはかりのおもかけとあらくみへき被詠
　　修子内親王
　文保三年百首奉られける時
　　民部卿為定
今はよの名をそ風にや位山かはるへき世乃後は

白縁と人のいふにたとへいへる事をよめる　高弁上人

昔より人の心の縁をしるしとの光をまつはいつまてか頼みし人
世はいまも木曽路といふ所もなくすきもてなく

兼好法師

思ひ川木曽のあさ布浅きのこ深く廣きへき絶なは
絶しとや

藤原唯親

あふ事の藪やまろをみつる雅と樹といふめ為

如淵法師

藪ちて月はくもりぬ老たり世に捕我思ふぬ我身なりけり

権少僧都光覚　暁義詣のさうへ侍りける時

九の華になりあひし月の子我思ふに思ひかくれきこゆや

基俊

終し

法性寺入道前関白太政大臣

みをしれはとまてもふかしこの暁とおもひも哉と人のしもまよひ
あたら人のなしくたらんを何にならむをとらまほしく侍れは

高弁上人

あらしふくとはへしといふおひさきや人のたのみけるに成りけり

雑哥中

うしとていくほとの世ともおもはぬに我身のうらみも捕絶え

親子内親王

家にてもうらみそもそもやまぬ江のそらの谷のつねの世

前中納言為相

百首奉りし時　前大納言実教

学ひ出てたくひてなこし雪月のかすきはいかにみそちなりけり

述懐を　法印定全

七十の年をかさねて今もなほ身のおろかなる十分のまよりせん

前中納言為秀女

あきらけき心のうちのさえのこるまことにあらぬ身とやなるらん

百首奉りしに　徽安門院小宰相

思ひしるいそちも残るうきまをすきそのゝちもなほ嘆かん

題しらす　前大僧正道玄

今はたゝかゝし心のうちにそよし思ひしられこさき世の末とまて

宣光門院新右衛門督

様あるは心を言葉にみつのこそありとも世にくいとゝさは世の

儀子内親王

おほやけ事明らかならんとすまんこそ日のおほ世を聞ん

百首奉りし時　前中納言雅孝

末のよと思ひなるゝもいかならん我か身はふる世のなかにさかゆ

世中さはかりける比東坂本にしおはしまして

御願よりも我をたのみて奉りける

権大納言公蔭

さりとても思ひ尽しえた君か代のさかへのかきりみるやらん

御返し

院御製

下草のこゝろはけさと思ふや我心ゆゑ露を光とやみん

文保の比にたてまつりける百首の歌の中にて

藤原為基朝臣

心とはすみはてぬ身のうき世にもなにゆへかくは雲

述懐の歌の中に　新宰相

ゆく末の身をしもやなにゝかはかなしとおもふ世を

藤原秀信

浮世とは思ひすてゝに捨身てかへしものをすてつれ

源仲教

身を捨といふなから身のほとそこにて世をやすらふ

権少僧都浄道

うき世をは捨はてゝもいとふこゝろもなほのこる身

従二位宣子

たのみこしあはれかりけるわかれにさらに身をや

文永の比出家の後にいかてかくなからへて出京の

比そこにて侍りける人の世事に

右大臣道雲

世のうきにおもひかへりて世に住そめし山里に

第二述懐といふことを

西園寺前内大臣母

老にそふうき身の何そうきことよ誰かさ(かと)

後京朝臣

浮世とて身をすてゝも捨かぬる身そよやすらふよ

雨を

大嘗会の主基方の屏風に

前大僧正道昭

瀬々のいとの尾上の松の枝ひきて月をかけてや神もまつらん

藤原宗秀

山まつのすゑの年ふりて世をかさねなほ代々のかすにそへよとそ

山田法師

君か代は千とせあへるめくみの神のうきにしつかにもこえ

読人志らす

身をかへてのちもそめつる世中を人のうへまて祈るなれ

権僧正忠性

ちとせふる契しおもひの川とよ我山の法をつたへつゝ末の繁栄

前大僧正公什

世をてらす光の御法一すちにひかれてつきぬ契成けり

雑御歌の中に　崇徳院御製

わか心なほかゝれいさゝかの住吉のあまの釣舟ひくとせよ

前大僧正道意

いかにせむ世をそむきても思ひしは捨てし身にさへ猶のこりけり

前左衛門督惟方使の別当やめて侍りける比歌

とありけるかへし給はりけれは

読人志らす

歎きとはおもはぬなけきはつらけれとかれはてにけるとしも

前左衛門督惟方

いつまてかそれとも思ひなさるらんそことなき身のうきことを世ゝは
　　　　従二位為子
心をも我身のうきにかれはてゝなほ人ゆへにうらみられつゝ
　康永二年歌合に雑の心を
　　　　儀子内親王
物ことにうつりかはるは世の中の心のうちのなほかはりゆく
　百首歌中に
　　　　安嘉門院四条
あはれなとかくはかりなるうき身にてなほいけるよのつきぬ世をふる
　雑歌の中に
　　　　徽安門院
世中のうきにつけてもおもふかなさもあらぬ身のはてはいかにと
　　　　寿成門院
あはれ此心の中はよみのをも思ひいてゝそよそにすられてそあれ
　百首歌講せし時
　　　　徽安門院小宰相
見し人もなきかおほくなりはてゝいまはわか身のうへそかなしき
　述懐を
　　　　後京極摂政太政大臣
うき身のたくひなきよのをおもふにもなほかはらぬはむかしなりけり
　夢中歓楽又紛紜といふことを
　　　　大江千里
夢とのみ見えしかきりはかなしくてうつゝにさめてなにをたのまん
　雑の歌の中に
　　　　後鳥羽院御製
おほかたのうき身はときもわかねともゆふくれことに袖そぬれける
　　　　権僧正永縁

なきさ代夢のうちにてみる夢ハ河竹ことにいつはりなれ

前大僧正慈鎮

世を捨てし昔の夢のうちとそ思ひしく世をもうき

嘉元百首哥よ夢を　後山本前太政大臣

いつくにかさめん夢ともしらすしてうきを見るかな

松明のゆめ　前左大臣

あはれ世に捨し身をてもみる夢ハ昔を夢とおもはてや

百首御哥よ　院御哥

見しよりも夢のうちなる夢とかやなをさめぬは覚ても

正慶二年藤原為基朝臣世の夢をなをさめむと覚て

中流るかぬ　永陽門院左京大夫

おとろくへきさそと思ひし浮夢の覚ぬまにこそ老の寝覚

ぬし　藤原為基朝臣

覚ぬまハ夢の世の夢みる程に覚ぬを鐘にかたき浮世の覚

雑哥の中に　内大臣実

あらましの夢ハ枕のとりとめて浮世の夢ハさめんとそ思ふ

従二位為子

なを深くまよふ心のさめて夢をゆめと覚る庵

藤原為基朝臣

ゆめのうちにみる世の中の夢をさそ思ふ夢ハ夢なれ

前中納言為相女

おとろかぬ此夢の世にさめてそ見る世のはかなき

後光院入道前関白太政大臣

みな人の心すなほき世なれともむかしにかへる道やあらなん

源頼貞

敷しまや和哥の浦人とふ人のあれはふるきあとものこさん

永福門院内侍

いまはたゝむかしにかへるときくからに和哥の道そ猶ひかりある
建礼門院右京大夫かつて仰に(?)
言葉のちりのこし侍けるを思ひ出て

今や世の昔をしのふことの葉やまたかへりてみちのあとも猶

右京大夫

名も高く十年あまりの行末はかたく我身にあまれる

てらさせ(?)川おもかけとゝめんなかれてはかたみの淵をわすれて
かゝる身はかきとむる世を恨むらん

前参議信成

すみなれし浅川の名にしあれはおなし流の淵とそ思ふ

藤原隆信朝臣

懐旧の心を

昔こそ人もかはらぬ昔なからもかへらぬは物わすれなり

弾正尹忠房親王

懐旧を

うつり行年月ありし時の今も猶

雑の歌の中に

儀子内親王

はかなくもうき世にかへす心とも思ひもかけぬ風のまへ
かたるゝ月のかけはかりこそ猶のこりけれ

前関白左大臣通

たくひともみえぬかなしきおもひの憂そ昔の夢なりける

式部卿恒明親王

かはりこし昔なからの憂身をはいさしはさそみん

藤原宗親

おもひねの夢よりかへるこゝろをもしるしてはなに昔のゆめは

李夫人を　　前内大臣冬

みしまゝの程おもひそ浅きけれ筆の跡あはれにかよひきかなしき

聞しかもそれとおもひて煙たつ清の跡に恋しさのまさる

ありしよのおもかけはかりにかよふなる煙をうつす夢そはかなき

賢人とて待わひし民部卿成範

かくしつゝ帰りてかへるにこそありけるかな

雑歌中に　　右兵衛督基氏

いかにしてかはらぬよるのあはれをかけてたのむへきなりけり

高階宗成朝臣

僧の世をわたる世はさておもひ出のよしもなくてやみなん

如願法師

志のふともわかまことある月影をさしてやなに思ふらん

後宇多院宰相典侍

ありし世のおもかけをのみおもひつゝかくてもまた我をおもへと

藤原頼氏

こともなく出てこしかたを思へはかなしみの月のみそすめる

三善定衡朝臣

折しあれむかしを志のふ涙にそ昔乃いつかしこそ見かゝる月

藤原為嗣朝臣

うき世をハ海みつとはさそはるれと昔乃月をそこそ忘るれ

後宇多院宰相典侍

老ぬれは月にみし事も今はたゝむかしをこひて見るそ悲しき

従三位為継

思ひその月見し影をそ見ぬるへき老の月には

前関白左大臣 基

面かけハ忘れぬ昔の秋なれとまたこそ月は猶そありける

とへ人志の浪

ともはにて遠く見えぬる影もかはらね

文保三年後宇多院へたてまつられける百首哥中

権中納言公雄

あやにくに志のふる事のみしけくて思ふすゝめもけに

述懐哥とて

藤原範秀

たのまれぬ世をすてかねて思ふかなたゝなにはの夢の浮世は

雑哥中に

従二位為子

捨もせぬさすかや世中をいとふ物からうき身なりけり

藤原資隆朝臣

何事もなにあらはそれとまたいひ知らぬ命の程に

身の程は世にいつまてか住はてゝ人もいひける

あつめしをきく　よろつ人ねかひ
けれはいかにと定知安世中にはなにとしきまよふかきりなん
哉し　寂然法師
ためしあれとおもふは侍るつれなくも此世をいとふへきならなん
我若未忘世雖閑亦忙世若未忘我雖退身難
離と　いふ事を　中務卿宗尊親王
背きてもなほ思ひやるのかちまて世にはわすれぬ我身かな世は
出家の後述懐歌中に
前中納言有忠
子を思ふ心にのみはまよふ素のいにしへ世にいつる道はともかくも
ねてしとかさね世をすてゝ捨ひしめはゝさ永福門院
いつさりて世を行ける　後伏見院御哥
捨てまた思ひもしらぬ苔衣いまより露をいかてほさまし
哉し　永福門院
おもひ入る岩の苔の花の露そけくりきの袖やくちなん
応長元年八月竹林院前左大臣かさりおろして
侍りけるにつかはしける
前大納言為通
かくしてもおもひつきせぬ世をそむき捨ての後の身はよそへていとゝこき
哉し
竹林院入道前左大臣
きえぬつき露の身をおもふむしろ捨ての世をいとふ心の身しきめ
年比のほとひとりの出家侍れけれ

あまてく家も位の宿の心ありしと人はいはゝ物を

民部卿成範

雑　前中小

梅京乃弓女

わか宿はさなからかすみのいそかはまたぬ計に来ん線の
内侍殿乃扇にすみ給ひしに[illegible]例[illegible]
よりもきかれは[illegible]

永福門院

長き世の昔かたりを[illegible]あらぬ井にはそゝやの[illegible]
御返し

同院内侍

ちりはすてさくやとこふ[illegible]のとゝの歌[illegible]しき
[illegible]のうつはくもるゝ時のまを老いき[illegible]命とそ[illegible]
述懐乃心をよめる

兼好法師

あふさかの関にてはいくさむつ世をへても道あり[illegible]

雑歌

従三位盛親

今は我さき世の花をみしを深山の奥の[illegible]わすれなき[illegible]
夕暮の雲のうらみとうちなかめ[illegible]

侍従の内侍堀川

花をとれきいろの雲は[illegible]我にはかはらぬものを

題しらす

兼好法師

猶さかりの花とも秋の[illegible]ひくすゑなきの露の[illegible]

後の世と思ふを遂りきこゆるを出でかなの[illegible]の[illegible]

依遍法師

[illegible]大僧正慈鎮

さきそめしよりつゞくれぬると思ふを世のならひそ

五月五日為道朝臣すゝめ侍りて法三十首すゝめ侍りける

あやめ草ひくもあまた侍りてあゝ大納言為世すゝめ侍りき

世許に侍

後二條院御製

いはぬをあはれ人の袖ぬらすあやめ草ひくてふ根をもかけてなさ

御返し

前大納言為世

ことしより千歳ふる屋のあやめ草のつまにもかゝることはの露に

雜哥の中に

二條入道前太政大臣

思ひ川なかれたえむは成りぬとも世にあまるらん

法印定泉

いはへぞ身をあやにくにつまれても千歳の言の葉ぞのこりつゝ

心ある人はあはれと思ふ侍りけり

郁芳門院宣旨

霧の花咲きてけるかとこそありの葉にまがへて立ぬるをさき

むかし清金剛院の桜をみて行くへの年くはいかが

ゆかむとよそに知りて待りなる

上西門院兵衛

なれにしを昔がたりに成りても花はみし世の友やかなしき

二條太皇太后宮大弐

かく許りゆく世の花はうれしと嵐とも人はなれ

後深草院かくれさせたまひての年の春伏見院の桜を

をおりて春そ世ゆかしく

遊義門院

春の物となにとふ花をそ梅と見る人の咲すさひつつ

伏見院御哥

かへし

花の都まだしと見えず都見るや村雨のあさ梅の咲きはなちなる

文永九年二月十七日後嵯峨院かくれ給ひぬと聞て

ていまた見ぬ冬の道にて思ひつゝまち侍りける

中務卿宗尊親王

かきりさへ我世と知るやいとひしく人の世の道の春のあるの道

中臣祐春其下にかへりてくるとて

中臣祐任

その川の音にきくこそみやこ人ゆきとふ花をおりつる

おなし大臣家にまかりて後何事を見る日にかへり

かくと申侍りしよりまたその年の春ひとつの山の文の

花の折りてはさきにけり世のみなくしを待ちける

前大ー

権僧正公雲

ふかき世は深山の花もさきぬれは見えけさきや春を見るかひ

後深草院かくれさせ給ての年の二月はかり西

寺に覚助法親王の許につかはせける

伏見院御哥

露けさは昔の春にかはりてもなれしかけこそ袖の春さへ

二品法親王覚助

かへし

かきくらす枕の露のきえかへり袖志ほるらんあきの夢

雑歌中に　　西園寺前内大臣女

露きえん河の瀬も誰志るべとふ人なしの蓬生の庭

後一条入道前関白家にて後八月の末つかた袖の

露もおなじ思ひ風やうらやむる人の[illegible]

有

従二位隆博

[illegible]袖の上に露をおきそふ秋の[illegible]

[illegible]

藤原光俊朝臣

[illegible]

高階宗成朝臣

なし

いまは又[illegible]

太宰帥世良親王の一めぐりに浄川寺へまかりける

とて

懽子内親王

常ならぬ世のならひの野辺の露きえて[illegible]

二条院[illegible]て又の年の春南殿の花を折て

人の許へつかはしける　　前大納言実国

九重に見し世の春は[illegible]花の色に[illegible]

又[illegible]三月ばかり

に源仲正か許に遣はしける

寂念法師

春きては花とは[illegible]山里を[illegible]

返し　　源仲正

かはらしなみし人なれきし山里の花はいくそとはむなしき世

顕親門院院崩御の比花をまいりける

永福門院内侍

とにかくにあはれかさねや春ことにゆくへつきせぬ別の花の春

御返し　　院御製

花のちり春の暮のゆくへにも知らぬわかれのなかきさ

後京極摂政かくれ侍りて後五月五日ありて従二位家隆

許よりいひつかはしておもひきえても涙の春の夢は別り

おもひやるさかゐは千世をへて侍るか返事に

前中納言定家

夢路にもあふ瀬は今は志ら露のおきとはわかれぬとそしれ

属もひかりはまつ侍りける時ききとてよめる

藤原為守

今はたゝ宮と世の外のかりの宿に浮世の夢をみそつる哉

雑哥の中に　　従二位為子

人の世はひさしといふもひとときの夢のうちにてゆくすゑそ猶はかなき

百首哥奉りし時　　永福門院右衛門督

いとなみのあはれはかりそそひにける猶のあすのみ世をもたのまむ

無常の心を　　僧正慈鎮

哀さもひとよりも我の秋とおもふそはてはかなしかりけれ

秋の月いくかへりてかすみぬらん人の身をまもり

小かれたる

伏見院御哥

彦星の逢てふ秋はくるれとも人そわかるゝ時をまちける

前中納言為相七年乃遠忌に為兼卿為業朝臣
一品経供養しけるついてに懐旧と云事を

久良親王

年もまた過ぬる秋も彼岸もや七とせの秋をこそ小けれ

近衛院乃御年に左大臣殿のつゝあまりそへて
侍りける年人のもとに七月七日によみてつかはしける

俊成

あまの川星あひの空はかはらねと別し雲井の秋そかなしき

月催哀傷と云事を

正三位季経

ちきりとそたのみし世とはしりなからあはれ[illegible]月

平貞時朝臣身まかりて後四十九日にあたりてかの[illegible]
ひつかはしける

前中納言為相

終もふかりし人の日数はかりもなき身の[illegible]なりぬる

前京頼氏

秋のさは毎[illegible]のことくなくさむる日数[illegible]

正和五年九月佛国禅師かくれ侍りて後下野の那
須よりのほり侍りける時[illegible]て[illegible]
とふらひつかはされたりける[illegible]の十月に
入滅し侍りけるは佛應禅師[illegible]つかはしける

前中納言為相

ゆく花の春を惜しけん風さよ風の木末のちりも世々

従三位為子なくなりにけるに

院御製

めくりあふ人の数にもなき身かは世のとかくにもあはれしき

哉しつむ

中務卿宗尊親王

みし人のなかのよりまつのあとにならへるとてまた世にはこゑ

朔平門院かくれさせ給て後よみ侍ける

永陽門院左京大夫

おりおりはかなしきあはれとのこる煙にそなれし人

安嘉門院四十九日の法事なとて出けるに前大

僧正教範許よりおもひおくれし後はあけくれ

とまりし人のわかれはなれとかはりぬる袖そ

返事とよ

従三位為信

遠ける人をそのかみの名残さへおもひ数にまさる

権大納言長家みまかりて後すみ侍ける歌とて

此子給ける

権大納言長家

忘れさりし世をやとはぬかなれはいつまても涙にやと

前大納言信成卿まかりて後よみ侍ける

前大僧正範憲

まかりける日数つけくれは文をかたみにしのひつるに

後西園寺入道前太政大臣みまかりて又の年服ぬ

きゝ侍りて　　　前大僧正道意

うりつゝ春の花のちりしゆへにかへらぬとなれは又ちるらん我

相空法師身まかりて侍りける後同し法師とてよみ
侍りけれはおもはさりしにわかれし世中は

宗然法師

いつまての世のあはれはとけとをれへ人の世の夢に

ぬる

如行法師

なき人をしのふの草の思ひはさきの海にすむ宿とひしを
むなしくなりてその法林寺にてむ(?)かしを思ひ

よみ侍りける

祝部成仲

煙風の方にいそきけるもかきりはつきさま家の移りに

後伏見院かくれさせ給ひて後従三位守子墓
所にまうてゝ後見まいらせし御遺跡なまとなく世にお
はしまさねはとて

法覚上人

もろともに蓮のうてなとむすひしや煙となりし跡のまよはん

左近中将維盛熊野の浦にて身をなけ侍りけるよし
きゝ侍りて

建礼門院右京大夫

思ひきやおなしみのりのうみに浪のうきにしつむへしとは

左近中将資盛西国の海にて身をなけ侍りけるよし
きゝ侍りて

思ひやれ

世中さたかにかはりける後西国の海にはまりて後に

おもひきや世のはなれの花ののちの世と

秋よかへりて侍けるまたしる人もみえはへらねはかく
よる川に思ひ我とあきはてにける世は
全性法師
ゆきえたに成ぬる世にあふ秋もひとりのこれる身こそ
後醍醐院かくれ給て後人の夢にまかりいてゝまほろし
にやかへらん我すむ山の松の下にこそとみ侍
ける世は新乃一句をときゝて經乃まきさしのためし
ら侍ける中に　前左大臣
わかれにし人よんやかへらん夢のうちは今そまことにこれ
後光明峯寺摂政第三年の仏事の比源邦長
臣にしともり侍ける　正二位隆教

いかにせむひとりやみのあはれしとみ　夢はみるとも世のはかなさを
しる　源邦長朝臣
さめぬへき夢の跡なるはかなさの夢をみし三年のはてもまた
遊義門院かくれ給ての比土左内侍さそはれて大原
て理侍けるに小火舎の煙たちのほりてところを
ところを見て侍けるに
かしけり　法印澄恵
立やゆきてかはるこゝろもなきものを煙のすゑの
前左大臣母の第三年の仏事志侍るにいへの
らく小まかせ給て御かたみにかゝせ給ひつけ
させ給ける　後宇多院御製

ちりぬへき秋の露とはみえなからいかにおきけるはなの露

かへし　　　右大臣

みなそこの光をそへよ蓮葉にしられぬ心の露の白玉

前大納言為家家にて百首歌よみ侍りけるに

安嘉門院四条

夢にのみうつゝはをしけれとも露消草のうへなりけるかな

人のをくれぬをまちをしてなきまも今は仏にむかひ

寄月法

すみ渡る心にかけてみなと見ゆるすまに月ののなしきはかな

むかしの友なりて侍るは月のおもかけ

赤染衛門

我よりものさきはなれにし人をこそ待ける

かへり給ひて人のもとよりつかはし

侍りける

純道朝臣

われもいはむかしの後のなくて歎ける

道済みまかりにけるにつかはし

ぬるまてもいつまてかへりしてきるを

赤染衛門

かりの世の宿とておもはれけるに山の端に

後一条院かくれ給ひての後月をみて

上東門院少将節

さ夜ふけて月は海にも入りつれとみゆるやまのは

おなしさまにて後日数もおほすくる成侍りしに

寂念法師

君をわかるゝ道のかなしさいかはかり月日をまてやさはらん

前中納言定家母のおもひに侍りける比ひとへのおもの

寒よこひ侍く雪のいみしくふりけるにとめてかお

はつかれさまとくれぬくおもひ

皇太后宮大夫俊成

子をおもふ心やよふかきあらしの乃おものことに見えけり

返し

前中納言定家

うらみをもおもひのこさぬ横雲やこの夢にはまたかよはん

当の子の日母のもとに渡りて

頓阿法師

世のうきにたへぬ所をまたふかき雲のあなたにもとむる

後嵯峨院の御忌に　上西門院兵衛

木のもとに我もかけとたのみし花の影はいまは山家に

後鳥羽院入道前太政大臣なりて後に山家に

御幸ありて花の咲きにけるを読侍ける

山家水を

後伏見院御製

おもひやれ世をのかれ住むこゝろをもきゝ奈にすめる

後深草院七月かくれさせ給ての又のとしの七月

亀山院も世をのかれまして

伏見院御製

きゝなれぬあはれの枕の氣色ハいさ今宵や露けかるらん

遊義門院かくれさせ給ひける枕屋の鳴ときゝて給ひ

とてかへしとハいはねと御くちすさひに枕屋に

宝町院かくれさせ給ひて後持明院御幸有て

楽に御覧してよませ給ひける

ひとめしかのの三とせのむかしおもへはいつも宿のつゆけき

後深草院かくれさせ給ひての秋九月のころめつら

しき後光照院入道前関白許より歌の事ありける

またはとりあつめてもたえぬものを

何ならぬ世の中の例ぞは

かりそめの露の枕をしはしとて時雨かはらぬ袖の涙そ

御返し　　　　後光照院入道前関白太政大臣

しひ屋のむかしの跡にきてひく露も時雨も涙そふらん

後深草院かくれさせ給ひけるに前大納言為兼二上世

の枕にあまた源氏やその露の涙をなにとかやと

申て侍りけるに　　　　従二位為子

ぬれそめし露の枕にかはらすてたゝふる世の秋の枕ならまし

おなし法世侍りし　　伏見院御製

あはれなる心そあらし山風もおつる木の葉の音なき世に

後醍醐院かくれさせ給ひて十月安福殿女御（栄子イ）さまに入給

ける戒師にてまいり侍りける

二品法親王慈道

契りおきしうき瀬の一しかも立出けむすみ染の袖

思ひすてゝ　入道二品親王道助

ゆふくれは袖のなみたのかはくまもしらぬ我も志らて秋の月

永福門院内侍のはゝなくなりてのちの秋頃よめる

光明院新右衛門督のもとへつかはしける

右衛門督

玉ほこの道のちりも此木のもとのこの一葉もおしき哉

伏見院九月二十日ころ紅葉を

永福門院

根もとなるはなの枝の花瀬にもくれ行月の影

文学上人遠忌九日よみ侍りける

高弁上人

古のめくりきはむかしにかへりきて契し親も

よみ人書

風雅和歌集巻第十八

釈教歌

ゆくゑなけくほるまよみあれへはいかをまかとていまさるらん

此歌は善光寺如来の御歌となん

いきて人みなる子のからに世ゝのりをそれはなれかたらん

かの御許に法をそ聖徳太子のよみ給ひけるとなん

補陀落の海にそまれる物なれはみなおなし法にすむねる

本意は長浜の縁ある人やしぬかたさ成あひくて

粉河寺にまうてゝおほ子をひきたてゝなりたまひけるに

とそやく流る海にすめる物なれは子のみなおなし縁

なまへとそ思ふとおりのひ法まてさためとよりける

に観音の志めし給ひけるとなん

法花経序品の心を　　西行法師

ちりまかふ花のにほひをさきたてゝ光を法のむしろにそしく

方便品　　前権か 大僧都源信

妙法のたゝひとすちのみありけれは又ふたつなく又三もなし

譬喩品の心をよめる　　権僧正永縁

もろともに三の車にのりしかとひとつを法のまことにそひく

不覚不知不驚不怖の心を　　慶政上人

おとろかてくるしともなく驚かぬなりあはれわか身の人おひの宅 陰り

信解品を　　前参議経識

年ふともゆくゑもしらぬなかそらにこの法にてそあひにける
前大納言為氏
いかにしてまよひきぬらんけふまてもそのみちしるへはかりなりけり
伏見院に一品經うたよませ給ける時信解品
とくをこそしらね
入道二品親王尊圓
我そらにしられあまりのおもひかなのこりつるへき身をもたのます
藥草喩品の心を
法成寺入道前攝政太政大臣
法の雨あまねくうるほふ草木のわけもひとつのたねとしりぬる
権大納言為成
くさもきもおなしめくみのつゆなれはいろかはひとつならぬなりけり
大僧正道意
草も木もたねをひらけるとなかれはゆくへにうるほふへしとこそしれ
前大納言為氏一品經寄よみ侍けるに安樂行品若入他家不與小女處女寡婦共語といふ文の心を
藤原為相朝臣
おのかみとしらぬはかりのおもひにてさそはれぬるをいかにかはせん
壽量品の心を
參議雅經
この世にてつひにみえぬと月なれとまた此山にすむとこそきけ
分別功德品を
正三位隆教
みな人のきくにしあはれ法のなをまことの道にいるそうれしき
藥王品是真精進是名真法供養如來といふ

心をもまたせ行らん　院御哥

たえぬまの谷ふかくて柳にかゝるさ庭の春風　赤染衛門

妙音品

家々のこありとやまたみな法の声をさへたにさへとは

普門品即得浅處の心を

平忠度朝臣

たのみつゝたのもしき世はおもひ河瀬にふかき頼とそきけ

陀羅尼品　赤染衛門

のりをまもる誓ひそたのむ末の世までもまもるときく

般若經常啼菩薩を

前大僧正覚実

法のため我身をうるも人はなし世をめくらはすみやかにせん

円覚経生死涅槃猶如昨夢の心を

院御哥

いまはまたみれはたゝ夢となりにけり昨日のことも身の春

居一切時不起妄念

かりのよのまことの日のもとの月の入ぬるやまのはの月

挙足下足皆是道場の心を

夢窓国師

あゆむともあゆまぬとてもいつくにか法の家路のほかなる

本覚流転の心をよめる

法印実隆

すみなれし岩かねのかはなれにしかつらきのみね嵐

随求陀羅尼経の倶縛婆羅門をよみ侍りける

前大納言忠良

松のかは法のこゑにて風はけしき音のしたまてそかよふ

従指無明即是法性といふことを

慶政上人

もえいてし思ひの花の春の夢みてやそてらの明りけり

三諦一諦非三非一乃心を

院御哥

まよひこし心のうちの月さえてまよはぬ秋の光

未得真覚恒処夢中といふことをよめる

寛胤法親王

うつし絵の庭にみえてなかはかなきゆめとも知らぬ心なるらむ

法印覚懐

ゆめのうちはさめての後のたよりなるゆめのうちにそさとるなりけれ

因明論の似現量の心を

前大僧正覚寛

むすひおくちきりはふかき心にておもひのほかにさとる秋の月

大教の御哥の中に　後宇多院御哥

我のみかわかれしともにあふき見む三国にもひろまりぬらむ

百首哥たてまつりしに　雑哥

入道二品親王法守

秋くれはみのりのこのはのちりぬるはへたてなき世のあはれなりけり
大梅山別傳院にて佛事行ひける時僧問雲門樹
凋葉落時如何雲門云體露金風といふ因縁を
頌ませ給ひけるついてなり
院御製
あきつ川のあかき葉まてそみなしけるのりのしるしにちりはてにけり
藤原為基朝臣
みちやいかに山の木の葉をちりつきて道こそあらはれにけれ
題しらす
佛國禅師
秋の山のはなもゆふへの色もみなまことのことにかへるなりけり
夢窓國師
出家とこのつとめ月のひかりをは山のはにのみ
眉間寶釼といふことを
院御製
さゆる夜の光さし入る月かけのしはしもさらぬ霜の白妙
一華開五葉結果自然成の心を
永福門院内侍
咲そむる庭の桜の一えたにまことの春のひかりにほひて
耽離職の題ををのこともよみ侍りけるに
前大僧正慈法
うき世をはなれし時の花の春の風にさそはるる月
大慈の心をよませ給ひける

後宇多院御哥

いかにせむ汲てしる人法のみつ絶なん末をくましとそ思ふ

前大僧正慈法

むかしみし鷲のたかねにすむ月のひかりやをくる山の端そ出き

前大僧正道玄

みれ人のかりのやとりのうたゝねの月のすかたも明かりけり

百首哥の中に　後宇多院御哥

世をてらす法の光やそはかけまし吹けぬつきせぬ法の灯

如何不求道安可須待老といふ事を

慶政上人

いつまても世はすみうくて暮ぬへき年をもしらて又くるも憂

雑哥の中に

前大僧正慈法

さりともれ先えのころ世明りける定ゆく月日法のひかりひ

前大僧正良覚横川にて如法経かき侍りし時　文長

のちの世もまて思ひやるらむ

前大納言為家

いにしへの法の末ならてやら川の梢乃志らしとそみつ

なりて

前大僧正良覚

我のみそなかき世乃すゑとみて五十路あまりの法ゆへき

光基寺にて十五夜小二月十五日山本入道前太政

大臣の許ゟ桜の枝にすゝけてあり侍る

きゝぬともおもかけは雲ゐのそらにむかふまゝ

やて侍りけるに　山本入道前太政大臣女

ありかたきぬとみてそ折しらるはるの花の白雲

大般の奥書に　承證上人

ちりまてもおしき紙たる法の舟のりにあふみのすゝ

観勝寺にて理趣三昧をおこなひける道場にむらさき

もみちのちりかゝりけるをよみ侍りける

従二位為子

法の庭にちりしく花も雪のことくにふりつもるさえとや見る

式乾門院十三年の仏事に法花寺にて唐女の一

切経供養せられける時穴小音楽のきこえけれはよみ

侍ける

慶政上人

法の庭に小楽きこえて極楽世界のおもかけに花やふりけん

極楽の時讃を前にいひけるに長朝を

皇太后宮大夫俊成

あさましや露はたゝきに花は蓮の玉をそ庭に玉そちりける

女人往生　後光明照院前関白左大臣

おと女ゝくもりてすゝてあるもよみ我ことにひとしく浪そたつらん

不浄観の心をよめる　前参議教長

まろ海をみれはわけくある身と見るかうちとそさきなん

雪山成道の心をよみて前大納言為世よつら

りける　法深禅師

ゆかりけり雪のみ山にしつめるをしれはかくてそ道をしるらん

偈　　　　前大納言為兼

さゝへきる雲のかけたにかゝらすはひかりをのこす月をこそみめ

大般若経中に　　　　如円上人

物ことに執ぬる我からそ長き世ゝの夢の眠の覚めぬなりけり

心をはなにゝもとめぬ心こそとりもなをさぬ山の端の月

　　　　　　　　従三位親子

理はまことにをしふる般若の光りのつみの時花はこれそまつ待

詞　　　　　慶政上人

まかへともしかすかにかほる花ひとりみて散るをまつ田

　　百首御歌の中に　　伏見院御哥

梅の花匂ふ心のなほ[illegible]にあはれたへかたきものにそみる

法蔵寺にこもりてよみ侍りける

　　　　　素暹法師

かりなくもみつけの基にちりをかくさき捨ほとなる

釈教哥の中に　　前大僧正慈鎮

般若経にもさ[illegible]ぬ経にて法花経にも
　　らすとみなも見えてまにし

風雅和歌集巻第十九

神祇歌

世中は人のあしともいふなる家をとゝめぬ人はそなたら

この歌は賀茂大明神の御歌となむ

三笠山雲井はるかにみゆれとも光は月のこなたにそすむ

よの中に人のあらそひあらん世は仏の心のみたれかはまし

此の歌は暦応三年六月の比春日の神木座ましける金堂にまうてさせ給ける時つけさせ給けるとなん

はなれてはみかさの山をたちはなれすゑのみちをもつき

是は春日の神木みやこにおはしましける比

ある人の夢に大明神の御歌とてみえけるとなん

波母山や小比叡の杉のみや井は嵐もさむしとふ人もなし

これは日吉の地主権現の御歌となん

有漏より無漏にいりぬる道なれは是そ仏のみもとなる

これは後白河院熊野御幸三十三度まいりける時

見えけるとて御殿にさせ給けるとなん

ほとけのちりのふちには神なれは月のさはりもはれぬへき

これは和歌の道に心ありけるものまうてゝよみけるに

奉幣かなはさりけるに晴後の月のうへをおき

ひきて月のさはりと成にけるとみえさと

いりける夢につけさせ給けるとなん

神祇を　　後伏見院御歌

神ち山内外の宮のちやうら君か代ぬと末まもりてそよ

建治百首歌に　　後西園寺入道前太政大臣

うち絶えすつきゝて川の流れそへて月の光のさやけきは

河を　　太上天皇

ますみ文三かはらいすゝ川神の末の神のまつりく

左兵衛督直義稲荷に奉納し侍りける十首歌

中に月を　　前左大臣

風はらふ光ぞ川の玉ききに知らるゝ世々の月

神祇を　　院御製

神風やみもすそ川のたえせてすむ世のあきらけき世

月五十首御歌中に雑月を

後宇多院御製

此の宮代てらみけの……いにしへの月の光

神祇月を　　荒木田氏之

ちはやふる月を世にすゝめいすゝ川ときはの波の清き流れ

度変太神宮そてらの春の日

度會家行

たかき井をへたてぬものを神もむかし

神祇を　　度會定誠

世はつきぬものを流れしみや川のあさきのこゝろに

みつのあさいけの宿をつなぎつゝ

太神宮まつるとて侍りける

中々にたゝ秋の中なれと志のひ中なるそ哀なる
けふまてはたえて寂蓮法師
若狭のみちも松川に氷りて百枝の雪をはらふとて忠
待賢門院流けくつらしいつ夜合のあけにいさ見そ
侍りける　皇太后宮大夫俊成
やすらはて見るもとほしの来風は志つえをたけは松の梢に
題しらす　藤原(葛)木田房継
かくてあるも思ひあはせよ神の世を神かきしるく流れての末
度会朝棟
かくれなきその末は神かけにおほれとも思ひあへぬ住吉の神せ
賀茂遠久

久堅乃あまの岩戸をさらせて神代のことや今のあきらけき
鴨祐光
きみかためみつきふりてさゝら神の流にすむそかしこき
賀茂雅久
かみ世のはしめの昔かやうに神祇しらさはあらはの神の
雑哥の中に
あまくたるまえてそ神の代の神の風代のことせよ住吉乃松
前大納言為兼
津守国夏
我身こそ神に祈りしかはけさとそ世のまもりとすゝめ給ふ
神祇哥中に
後光明照院前関白左大臣
生神一念の松乃ことにあきは神の宮居もまもりやらむ

表白おはりて其の敬白の事をとてたまはりける

京極前関白家肥後

みかさ山その氏人のまもりせはたかきさかへや神もみるらん

雑部の中に

前太政大臣

我のみかくと思ふ大かたもみかさ山にてそのこゝろはさかえ也と

表白おはりてある　刑部卿頼輔

数ならてまたこそにはあかぬきとはかなきみかさ山これ

寶治百首歌中に寄社を

前大納言為氏

ゆつりおける神世もとほし小塩山おほ野のみかきの松の緑

建武のころ雑御歌中に

後伏見院御歌

吉のみなもとは末の世まての石清水さそこそたえぬ御代の世には

神祇を

太上天皇

春の色も猶たえぬ二葉の世はいかにいまそ見る今日の川瀬にうつる世ともがな

百首歌中

いのりおく心のまゝにすゑまても石清水にこゝろゆく世々すゑの世と見ん

神祇を

左大臣

今までは曇らぬ月のみかさ山あふくにまさる光ともかな

表白おはりて月をみて　中院雅春

すゝしさの神のみかさの山かけはいつよりか月をみるらん

祖父雅氏自筆の歌本をみ侍りけるにかく見えける

中臣祐植

かはらしな誓えむかしに成ぬとも神の心乃代々のことの葉

文治六年女御入内屏風に春日祭社頭儀

皇太后宮大夫俊成

春の日もひかりことにや照すらん玉くしの葉にかくるしらゆふ

神祇を　　　紀俊文朝臣

若草やさかきやけふの末のつきをまとに神わきしけきの乃笑

日吉祭を見侍りて　　大僧正慈鎮

あきらけき玉くしの葉の日かけには志らの枝にそぬきかけ行

相光房

うち風やつきなくさに誓をとゝめそ神世をうけし跡なれ

春日の文神主よまかりてよめる

中臣祐臣

かすか山わか誓ともかけてみれともは神をも忘れさりけり

雑下

賀茂教久

世はいのる心の祈やうけぬらむかしにまて小叙そつくす哉

天台座主にて侍りける時日吉祭の日経通七八許

うれかけのくるまにて侍りけれは

入道二品親王尊快

久方のあまの川日吉の神さふる月のかつらそひかりそへけり

神祇を

祝部成国

生れきてなほのほりつるとこそ神垣に契ありける身と知らるれ

前中納言為相

代々へて照らし日もし此かゝる撰も今のさ氏(?)もけふぞ知る
寿続和歌とよふとは

前左大臣

九重にあまてる和歌のかげまでてつきを続くは今もかはらし

権大納言公蔭

玉てらん光をも川をも千年続つくまで我世のひかりあまねや
続和歌集まきて三の御代をもそへまつりてこそ

源長朝臣

かすむ夕日にさえ新しとそてらす光よみち続く川をもあをぐを
暦応元年津の国そのほかまてまつりてかへる哉

後信若和歌にちかくて見えはべる

高階師直

あまくだる神のめぐみは世にさかえ君があまねく恵みをも
且若和歌をそへまつりける百首歌中に桜を

皇太后宮大夫俊成

山桜ちりかふをなをみるまでにそのよにさける花やあらん

雑歌中に

前大僧正慈鎮

日の本にやまと和歌の国ときこえしやまとことのはとなりぬる

嘉元百首歌たてまつりける時和歌

後西園寺入道前太政大臣

あきつ州和歌の浦ひろく別くる道にまよふ道ぞかしこき

おなし心を
後宇多院御哥
まことの道の川やしきしまをいまもひく跡親ある家の
國はおさまる

風雅和歌集巻第二十
賀哥
百首哥たてまつりし時　民部卿為定
治まれる代ゝのためしに志きしまの風もたえすそ今さかゆらん
慶賀の哥とてよめる　皇太后宮大夫俊成
海とほや松も十かへり花さきて君にそ人のとはんとすらん
題しらす　俊頼朝臣
大かたの流の末を君か代のもとにとれとや流もすむ
大蔵卿行宗
君か代の限はしらぬ千とせとふこゝろもかみもおなしけれは
前参議雅藤賀茂社哥合に祝の

述懐を
従三位頼政
おもひえぬ山へかくれしみかきもりよはにしめし世にはゝかりし

宝治百首歌中に寄日祝と云事を
冷泉前太政大臣
みかさ山峯よりのほる朝日影ものまねく世の春

山階入道前左大臣
岩戸いてし日影も今そ光そふ神代のあとにてらすへき世を

花山院前内大臣
玉くしけ二かみの緑に出る日はのとかにてらすかみの光や

祝の心を
大江宗秀
天のした誰かいさめのなき風ふかて千世のあめの光そ

山月を
前大納言俊定
千世ふへき亀の尾山の杉の月わか君か代にさかゆくも
嘉元百首歌に祝
後宇治前左大臣
かけのてらしの数ある末の代は月日とゝもにかきりなきそ

寄月祝を
春宮大夫実夏
曇りなき御代のひかりの月やそ万代の鏡なりけり
叙位除目を見て祈りかなはに禁中

月と云事を
二品法親王慈道
秋の雲井の月もあきらかに御代の光をそへてこそ見れ

延喜御時御屏風の歌
貫之

あつまりし俊成卿を百とせ九まではしめ日をまもりしたしき

正月ふたつあの雨のふる庵にてよめる

能宣朝臣

時しあれはまつ人の世にすみよしのなかにあるらん松ならんしかし

人の家にまつりし日の小松をうへて松の小宮のかり

かりそめにむすひつきまし

法橋顕昭

宮あまたいませし時は花さきにのりの小車まつ風やまぬ

清輔七十賀屏風の歌

能宣朝臣

ちとせへと松のよはひを君か春をたちてそかきたる

長元六年内裏にて殿前桜花といふ事を

権大納言長家

よろつよをまつへき小松原たちそはれはいつの年の花も見るへき

かくや

廬義王賀し侍りける時屏風の歌によみ侍りける

中務

あそひかはまつとる花のあかつきまてやはなを世にはら

寛治元年三月二日白河院法性寺にて殿花と

いふ事を講ぜられし

前大納言公氏

千とせまてなかしと今日にはしめ花のみゆきは春とこそきけ

山階入道前左大臣

万代まてまつのいはひ桜年のよはひてかさね見ん

右近大将道忠

さくら花千とせの春のをりにあひてあかぬ心のかきりをそしる

正嘉三年西園寺にて一切経供養せられ侍りける頃
の日翫花といふことを講せられけるに

深心院関白前左大臣

けふよりや千とせをかそへてさくら花君か千とせの春をかさねて

山階入道前左大臣

君かため色そへて咲花なれは千代のみゆきの春もまちけむ

後深草院少将内侍

咲花の盛は千とせの春のゆくやいく千代まての春にあひなん

春哥

入道前関白太政大臣

ゆく末を松のみとりに契おきてかはらぬ宿の春哉

文永八年正月叙位に一級ゆるされて侍りし年
又禁庭松久といふことを講せられけるによみ侍りし

従二位隆博

今よりは雲井の松にみつのゆ一しほまさる春のめくみを

嘉元二年伏見院に三十首歌たてまつりける時
松祝

後光院入道前関白太政大臣

おほはらや神代の松のみとりこそ千世まていのるすゑはかはらさ

七十賀し侍りけるに人々のよりて侍りけれはよみ侍る

祝哥

祝部成仲

もろ人のいはふ千とせのかすみつるおりそ老木も花そ咲へかりける

小松内大臣家にて菊合し侍りけるに人にかはりてよみ
侍りける　　建礼門院右京大夫

しもかゝる宿のあるしのこの花もとりしくはしもむかしなりけん

菊中納言通房にてひ帥すみけるころしのひ
けるとて　　康資王母

かすならぬ千とせのよはひもそひぬらん人をいはふにひかれてそ経ん

寛治百首歌中に寄菊

土御門院小宰相

神路山の松の梢にしら木綿のかけて千世まもるちきりそとみん

建仁元年三月歌合に寄神祇祝といふことを

後京極摂政前太政大臣

君か代のためしと見るや川の春の松むらにもかゝるに

文保三年百首歌中に

民部卿為定

九重のみきりに志けき呉竹のおひそふかけは千世の数かそ

建武元年中殿にて竹契遐年といふことを講
せられけり　　前大納言尊氏

百敷やおひそふ竹の数ことにかはらぬ千代の色そみえける

後伏見院立坊のはしめつかた遊義門院より竹を
たてまつらせ給ふとてさしつかはしけるに竹に
添へて世の人おほせことありける
に書付侍りける　　従二位為子

春秋の文科にあひて万代にちきる竹とこそ在

法性寺入道前関白家にて鶴契遐年といふことを
よみ侍りける　　文内永範

あしたつの千とせをすてゝや契るらんかきりもしらぬ君かよはひに

続古今竟宴に　　冷泉前太政大臣

むかしたにひろめつる道も今はまたひかりをそふる和歌の浦波

和哥所にて皇太后宮大夫俊成に九十賀たまはせ
ける時　　後京極摂政前太政大臣

百とせにちかき齢をよはひの君か御代のとしをかそへむ

七十賀の後よみ侍ける　　祝部成茂

君にあひてこえける年をかそへつゝ八千代をたのむ松のことの葉

嘉元二年後宇多院に百首哥たてまつりける時松
を　　左京大夫俊朝臣

世にかて君かひさしき松の言の葉をけさみるけり今そかひ有

百首哥中に　　院御製

みなもとのはしめの末そ治れる世をたえぬ川の今日のなかれ

寄国祝を

あし原やみすまて国の風なひく民の草葉もさかえゆくなり

祝といふことを　　前左大臣

なかれゆくたえぬ御代をも十かへりのひさしくもさかふ松の葉

雑哥に　　参議定忠

みことのりうけたまはる道のさかりの時に植けり園のあさたちる

後鳥羽院御時五人に廿首をめして百首よませ
させられける時読侍　如願法師

あひ見し御代にかはらぬ緒たえしかりけりとは人のとふらん

天禄元年大嘗会悠紀方屏風の并近江国都
名橋をよめる　兼盛

見川さかのほるもそこみつゝ末遠の世ゝの長かれ君をとそ見る

承保元年大嘗会巳日退出音楽急にあはせ
のけし　前中納言匡房

みつき物はこふよろつのくるまけり川めの声そさかゆる

同御時屏風の歌人の家の門田にいねかる所あり

君か代はたえぬ門田にかりそめの山をみすゝめかねつさかゆ

むさしのゝむさし人あり武家

なりひらとおもひなしかは御代のしるしはおほきみのつきせぬ

寛治元年大嘗会屏風に小松原のかたかきたる

おほく水ありそのほとりにもちむかあり

こ松原さしてやちよのすゑにはしきにかみよのつなにのせむ

仁安元年大嘗会辰日退出音楽にあはせる山
皇太后宮大夫俊成

吹風は枝もならさぬよろつ代とよはふ声のみとよむ山

正応元年大嘗会主基方屏風に桑川
岸菊盛開行人渡下流　正二位隆博

くむ人のよはひもさそなかからむやすの川の菊の下水

永仁六年大嘗會悠紀方屏風長浦池端午日

採菖蒲　　前大納言俊光

君代のためしになか浦の池のあやめハちよをそひける

杉明大嘗會悠紀方屏風増井納涼の人あり

正二位隆持

すゝしさハます井の清水むすふ手にたえすかゝるひろ葉の杉

暦應元年大嘗会悠紀方神楽哥近江国鏡

山　　正二位隆教

岩戸あけし庭の鏡の山かつらかけてうつさむあかりけさ代